

令和三年（二〇二一）三月二十六日発行
『大倉山論集』第六十七輯抜刷
（公益財団法人 大倉精神文化研究所）

大倉邦彦と「日本文化講義」

―在野の教学刷新実践者とその思想善導講義―

上久保敏

大倉邦彦と「日本文化講義」

―在野の教学刷新実践者とその思想善導講義―

上 久 保 敏

目 次

はじめに

一 戦時期教学刷新事業としての「日本文化講義」

(一) 思想統制と学問統制―教学刷新への展開過程

(二) 思想善導を目的とした「日本文化講義」

二 大倉邦彦による教学刷新への取り組み

(一) 大倉精神文化研究所を通じた教学刷新事業

(二) 大倉の教学刷新論

三 大倉が担当した最初の日本文化講義―北海道帝国大

学における三回の講義

(一) 北海道帝大での講師選定の経緯

四 大倉によるその後の日本文化講義

(一) 講義録に見る大倉の日本文化講義の概要

(二) 大倉による講義ノートの準備

(三) 講義録と講義ノートの比較

五 大倉にとつての日本文化講義

(一) 昭和一四年度以降に担当した日本文化講義

(二) 神戸高等工業学校における日本文化講義

(三) 東京高等商船学校における日本文化講義

五 大倉にとつての日本文化講義

(一) 日本文化講義の趣旨貫徹による教学刷新の実践

(二) 文部当局からの認定

おわりに

はじめに

大倉精神文化研究所の創設者であり、実業家にして教育者、思想家でもあった大倉邦彦については本誌『大倉山論集』第五〇輯（平成一六年）が「大倉邦彦研究」という特集を組み、教育者・思想家としての側面を中心とした論考を掲載するなど、これまで様々な論考で取り上げられてきた。ただ、現在までの大倉の研究については実業家や教育者としての足跡や思想家としての側面に焦点を当てたものは比較的多いが、戦前日本の教育史の文脈で大倉を捉え、在野で教学刷新を実践した人物という視点から考察した研究は寡聞にして知らない。

また、戦時期の我が国における学問や教育に対する国家の統制については、日本近現代史や教育史の分野を中心に今日まで研究が続けられている。しかし、昭和一一（一九三六）年度から学生・生徒を対象に開始された思想善導策である「日本文化講義」については教育史分野の研究書や一部大学の自校史の中で部分的に言及されることはあっても、また、特定の日本文化講義に焦点を当てた研究はあっても、日本文化講義の全体像に迫る詳細な研究や特定の思想家が行った日本文化講義を重点的に考察した研究は現時点では十分に組み込まれているとは言い難い^②。

本稿ではこれら二つの問題意識から大倉邦彦の教学刷新実践者としての側面に着目するとともに大倉が行った「日本文化講義」について考察する。本稿の構成は次の通りである。まず、我が国における教学刷新の展開と日本文化講義について概説する。次に大倉精神文化研究所（以下、本稿ではしばしば「大倉研」と略記する^④）の教学刷新事業や大倉の教学刷新論を取り上げることににより、大倉が推進、構想した教学刷新について明らかにする。続いて大倉が実際に担当した日本文化講義についてその概要や大倉の準備を検討し、最後に在野で教学刷新を実践した大倉にとって

日本文化講義はどのような意義を持つことになったかについて考察する。

一 戦時期教学刷新事業としての「日本文化講義」

(一) 思想統制と学問統制―教学刷新への展開過程

我が国では大正一一（一九二二）年一月に全国各地で組織されていた学生の思想団体の統合組織として「学生連合会」^⑤が結成されるなど大正末期から昭和初頭にかけて学生運動が盛んになり、大正一四年末から一五年にかけての「京都学連事件」や昭和三（一九二八）年三月の「三・一五事件」^⑥など文部当局は学生・生徒の思想問題への対応を迫られることとなった。

文部省は昭和三年一〇月に専門学務局内に学生課を新設して思想対策の強化を図り、翌年七月には同課を学生部に昇格させ、更に昭和九年六月には組織を拡大し思想局を設置するに至った。文部省はこのような思想統制を行うための省内組織改編と併行し、昭和六年六月に学生思想問題調査委員会を設置して学生の思想問題への対策を審議させ、この審議会の答申に基づき昭和七年八月に思想問題の解決を図るための機関として「国民精神文化研究所」^⑦（以下、本稿ではしばしば「精研」と略記する）を創設した。

思想統制の具体的施策としては各種の講習会が開催された。まず、昭和三年度から帝国大学や官立大学、高等学校、専門学校などの文部省直轄諸学校の学生主事・生徒主事を対象とした「思想問題講習会」（文部省が主催）が開催され、昭和四年度からは中等学校、小学校の教職員対象の講習会も開催された。昭和七年度からは各府県が行う思想問題講習会である「思想問題府県委託講習会」が開催され、更に昭和九年度からは各府県に国民精神文化講習所が設置

され「国民精神文化講習会」と「思想問題講習会」が開催された。

この他、昭和三年には学生主事・生徒主事を文部省直轄諸学校に設置し、昭和四年以降各学校長や学生主事・生徒主事を招集した会議を開催して、思想の取締の励行や訓育の徹底を図った他、思想善導を目的とした「特別講義」を昭和五年度から官立高等学校で実施することになった。この特別講義は昭和六年度からは官立専門学校や官立実業専門学校、大学予科などでも実施されるようになった。

このように文部当局による思想統制が進む中、昭和八年には学問の自由や大学の自治への弾圧となる「滝川事件」が起こった。更に昭和一〇年二月に貴族院本会議で菊池武夫が東京帝大法学部教授・美濃部達吉の天皇機関説を批判する演説を行い、陸軍皇道派を中心に天皇機関説への攻撃が高まった。学問の自由を大きく揺るがす「天皇機関説事件」である。最終的に政府は昭和一〇年八月と一〇月の二度にわたり国体明徴声明を発し、天皇機関説の教授を禁じる事態となった。学問が当局による統制の対象となったのである。

思想対策を担う精研は教学刷新を遂行する先導組織とも呼ぶべき機関であったが、天皇機関説事件による国体明徴運動の高まりは学問への統制を本格化させることになり、教育についても中等・高等教育を問わず、国体の本義に基づきその内容を根本的に刷新することを目的として昭和一〇年一月に「教学刷新評議会」が組織された。昭和一年二月の二・二六事件による中断を挟みながら教学刷新評議会は同年一〇月に答申を出し、「第一、教学刷新ノ中心機関ノ設置」、「第二、教学刷新ノ実施上必要ナル方針」、「第三、教学刷新上必要ナル実施事項」を提示した。ここに教学刷新が本格的に展開していくのである。

昭和十一年一〇月に出た教学刷新評議会の答申に基づき、昭和十二年七月に文部省の思想局は廃止され、文部省から独立した外局として教学局が設置されることになり、教学刷新事業に当たることになった。

(二) 思想善導を目的とした「日本文化講義」

「日本文化講義」は昭和一一（一九三六）年七月二二日付けで文部省思想局が帝国大学や官立大学、高等学校や専門学校、実業専門学校などの直轄諸学校及び私立の大学・専門学校に対して実施に関する通牒を出し、国家予算により大学教員等を動員して各校に必修科目に準じての実施を求めた「国策講義」、「官製講義」とも呼ぶべき講義である。日本文化講義は一（一）で述べた「特別講義」の後身であり、その目的は学生・生徒に対して国民的性格の涵養や日本精神の発揚に資するとともに日本独自の文化・学問に対する理解・体認を得させることにあった。この点で日本文化講義は学生・生徒を対象とした思想善導のための講義であった。

ところで昭和一二年九月一三日の学生生徒主事会議の劈頭で菊池豊三郎教学局長官は教学局設立の由来、使命、方針の概要を述べている。菊池が語るところによれば、思想問題は世界大戦後の大正中期の動搖期に発生し、国体に悖れる不穩過激なる運動として展開していった。それ以来幾多の不祥なる事件を続発させてきたが、昭和一一年以降非合法的運動形態をさけて、いわゆる人民戦線なる合法的擬装形態を以てする運動が行われることになり、左翼的思想運動方面においては決して軽視できない情勢にあった。菊池は、明治以降、日本が政治・経済の方面だけでなく教育・学問においても西洋個人主義の深い浸潤を受け、一般国民も知らず知らずの間にその影響に累せられて来たことを指摘し、思想問題については「国家の根基を培ふべき我が教学は、云ふ迄もなく、個人主義及びこれを本とした諸思想を排撃しなければなりません」と高唱した。⁸⁾

また、教学局の所管事業として、国体の本義を体得させ、教育を通じて日本精神の闡明に寄与させるため、師範学校・中学校教諭に国民精神文化研究所教員研究科に入所研究させていること、大学予科・高等・専門学校教官に対しては日本文化研究講習会を実施し、大学・高等・専門学校学生生徒に対しては、国民的性格を涵養する目的をもって

直轄の大学・高等・専門学校に日本文化講義を実施しつつあること、昭和十一年九月に設置した日本諸学振興委員会において教育学・哲学・国語国文学・史学・芸術・法学・経済学等にわたって我が国独自の学問・文化の創造発展に努力していること、昭和十二年三月に「国体の本義」を編纂し、国体を明徴にし国民精神を涵養振作するとともに教学刷新の基本を示したことなどを菊池は述べている。

このように日本文化講義は「日本文化教官講習会」、「日本諸学振興委員会による各学問分野における学会の開催」、「『国体の本義』の編纂」などとともに戦時期のわが国における教学刷新事業の一つとして位置付けられる。昭和一一〇年度に各校で実施された日本文化講義の主題はほぼ全ての学問分野にわたっており、日本文化講義は帝国大学や直轄諸学校の全学生・生徒と私立大学・専門学校の相当数の学生・生徒が受講した点で教学刷新の一大事業と呼べる施策であった。

二 大倉邦彦による教学刷新への取り組み

文部当局を中心に官が教学刷新を進めていく中で、在野で教学刷新を実践していったのが大倉邦彦である。大倉は大正末期から昭和にかけての日本の教育や思想状況に憂慮の念を抱いていた点では文部当局と同じ問題意識を持っていた。私財を投じて大倉精神文化研究所を設立した事実から判断すれば、文部当局以上に日本の思想状況や大学教育を懸念し、教学刷新の必要性を強く感じていたという方が適切かもしれない。

(一) 大倉精神文化研究所を通じた教学刷新事業 設立趣意

大倉が教学刷新事業を推進していくのは昭和七（一九三二）年四月に設立された大倉精神文化研究所を通してである。その設立趣意には次のように記されている。

不肖固より浅学非才なりと雖も、徒にこの世態を袖手傍観するに忍びず、もし自己の努力により、多少にてもこの時弊を匡し、我民族の発展に貢献することを得ば至幸なりと考へ、茲に精神文化研究所の設立を企図するに至れり。

宗教的信念に基く人生觀の確立に次いで、不肖の最も強く提唱せんとするところは健全なる國家觀の確立なり。即ち弘く世界史を貫く人類文化の普遍的意義に通曉すると共に、深く我國を指導すべき精神文化の本質的価値を精究し、正しき信念に基く國家觀を確立することは又本研究所以設立の動機なり。

希ふ所は理論と現実との合致、法と人との一如、而して特に國家に即して人類文化の世界的意義の發揚、而も之れを貫くに眞の創造的研究に基く論理と規範との確立なり、幸にこの研究機關を通して眞に國民を指導し、日本文化の精髓を發揚し、進んで世界の文化に貢獻し得べき力ある宗教家・教育家・思想家・実行家の輩出して、時代に一道の光明を与へ、國家に嚮方するところを知らしめ得ば、不肖の本懷之に過ぐるものなし。（昭和四年度『私の使命事業』¹⁰より）

この設立趣意に見られる「我民族の發展」、「健全なる國家觀の確立」、「深く我國を指導すべき精神文化の本質的価値を精究」、「正しき信念に基く國家觀を確立」、「日本文化の精髓を發揚」、「世界の文化に貢獻」という文言は思想問題を憂う大倉の内面の危機意識の表出と見るべきであらう。

昭和一一一年一〇月に出了教学刷新評議会の答申では「国体・日本精神ノ真義ヲ闡明シ、精神諸学ノ基礎的研究ヲ行ヒ、ソノ確立發展ヲ図ルタメ当該研究機関ノ整備ヲ図リ」と国民精神文化研究所の整備充実の必要性が説かれているが、大倉研の設立趣意はそれを事前に織り込んだかの如き記述になっていた。同じく教学刷新評議会の答申にある「学生ノ教育ニハ、敬神崇祖ノ精神ヲ涵養シ日本人トシテノ自覺的修練ヲ重ンジ、国家觀・人生觀ノ確立ヲ図リ」という大学の刷新に関する事項の文言についても人生觀・国家觀の確立を謳う大倉研の設立趣意がこれを先取りしており、大倉研を設立するに当たつての大倉の理念は文部当局の教学刷新の理念に明らかに先行するものであった。

大倉研の講習会事業

大倉研では設立から半年後の昭和七（一九三二）年一一月に早くも「臨時神道講習会」（第一回「日本精神講習会」）を開催した。講師は宮地直一、山本信哉、河野省三、田中義能、星野輝興、井上哲次郎、黒板勝美、今泉定助、植木直一郎であり、日本文化講義との所縁が深い講師陣であった。

『大倉精神文化研究所臨時神道講習会要項』（昭和七年一〇月）にある趣意書には次のように書かれている。

我国に於ては最近数十年来その制度文物の悉くを欧米に学ぶの急なるの余り日本伝来の雄渾なる精神を忘却し
恰も決壊せる河水汎濫の中に国民はその帰趨を迷ひ首鼠両端全く前途の光明を喪失したかの感がある

今回当研究所はその使命の一端を果たすべく臨時神道講習会の開催を企てる事になった 幸に斯道の大家諸先生も当研究所創建の真意を了解せられ本会を通じて動もすれば不振に陥らんとする神道の精神を発揚しその懿徳を後代無窮に伝へんと非常なる熱誠を以て別記の如く夫々専門の講座を担当せられる事となつた 従つて本会を機縁とし我国の儒仏の中に又政治経済教育の中にこの神ながらの大精神が蘇生躍動して万民斉しくその自覺を強

固にするの日が到来すれば即ち独り主催者の本懐たるのみではない

この趣意書にある「神ながらの大精神が蘇生躍動して万民斉しくその自覚を強固にする」という表現に象徴されるように大倉研の臨時神道講習会は神道の精神の発揚を目的として開催された。

国立公文書館が所蔵する「内閣 大倉精神文化研究所臨時神道講習会出席者二関スル件」という行政文書¹⁾では昭和七年一〇月二一日付けで内閣官房総務課長が「貴所臨時神道講習会ニ内閣ヨリ左記一名聴講致サセ度候間可然御取計相煩度此段及申込候也」と内閣印刷局総務部福利係長の氏名を記し、「追テ右ノ外公務ノ繁簡ニ応シ内閣書記官又ハ其ノ他ノ中ヨリ随時聴講セシムル筈ニ候間出席ノ節ハ可然御配慮相煩度」と大倉精神文化研究所に回答していることが確認できる。

この行政文書に綴じられている「大倉精神文化研究所 臨時神道講習会 勧誘セル聴講者芳名」には神奈川県、横浜市、東京府、東京市の学務部（課）、内閣、宮内省、大蔵省、外務省、司法省などの中央官庁、参謀本部、軍令部、天台宗、真言宗、臨済宗、浄土宗、日蓮宗などの教派、国民精神文化研究所、東京府、神奈川県内の中学校の校長または修身教師、同じく高等学校の生徒主事または修身教授、東京府内の帝国・官立・私立大学の学生主事などが対象として記されていた。

その勧誘の対象は昭和三年度から思想統制策として実施された「思想問題講習会」の参加対象と重なっており、文部省主催の思想問題講習会には遅れるものの精研が行った第一回の講習会（昭和一〇年二月の労務者指導員講習会）よりも二年三ヶ月早い開催であった。

なお、この講習会は昭和八年からは「日本精神講習会」と改称し、昭和十一年まで開催されたが、大倉研では他に昭和八年から一二年まで「仏教講習会」を開催した。これらの講習会の受講対象に学生主事が入る点などを見ると、

文部省思想局・教学局の事業として昭和十一年に始まった「日本文化教官講習会」を先取りする側面もあったことがわかる。

研究普及としての発行事業

大倉研は前述した「臨時神道講習会」の速記録である『日本精神叢説』の第一集を昭和八（一九三三）年四月に刊行した。「刊行の辞」には「本研究所は国体觀念の把握、民族的信念の復活に極めて意義深い其等の講義を筆録し更に各講師の校閲を経て、之を臨時神道講習会叢書として出版することにした。冀はくば我が国特有の神ながらの大精神が我が国儒仏思想の中に、将又政治經濟及び教育に於て蘇生躍動し、万民が齊しくその自覺を強固にするの日の近く到来せんことを」と記されている。¹⁵

因みに国民精神文化研究所は研究紀要の『国民精神文化研究』、国民精神文化に関する研究に必要な資料文献である『国民精神文化文獻』、国民精神文化について必要な教養を与える『国民精神文化類輯』、機関誌である『国民精神文化研究所々報』などを発行したが、最も早いのが昭和八年度に刊行された『国民精神文化研究』である。ただし、昭和八年度刊行分の松本彦次郎『古事記の成立』や紀平正美・小島威彦『真理とは何ぞや』などその第一～四冊が発行されたのは年度末の昭和九年三月であり、大倉研の『日本精神叢説』に一年近く遅れていた。研究普及の発行事業は官である精研よりも民である大倉研が一年近く早かったことになる。

なお、『日本精神叢説』と一字違いの『日本精神叢書』を文部省思想局が刊行するのは昭和一〇年からである。

国体の明徴に対して

大倉研は国体の本義を明徴にする一つの方法とすべく、昭和七（一九三二）年一二月に基礎的出版として『神典』を刊行する決議を行い、田中義能（古事記）、植木直一郎（日本書紀、風土記等）、河野省三（日本書紀、万葉集）、星野義輝（宣命・寿詞・祝詞）、宮地直一（延喜式）が編纂に当たり、昭和十一年二月にこれを刊行した。同書巻末の「神典刊行の趣旨」には次のように記されている。

明治維新の当初より我が国はその固有文化の真髓の上に欧米の文化を摂取融合して今日に至れり。然れども彼の近代文化は物質主義個人主義自由主義等の社会国家を基底とするもの多きを以て、動もすれば我が国体精神と背馳するものあり。……熟ら惟るに我が国体の本義は載せて古典に在り。是を普及して国本を培養し国民の自覚を喚起すること刻下の要事なれと信じ、ここに古典編纂の事を創めて既に三年有余、各専門の権威者に依頼して原典を国文に書下し総て訓を施し厳正なる校合を経て是を一冊に纏め今や甫めて其の上梓を見るに至れり。

抑も本書を神典と称ふる所以はその収むるところ悉く神国の本源を明示する尊き不磨の古典たればなり。幸に本書によりて神聖なる我が国体の本義を精究し国民斉しく赤誠報国の臣子たるの自覚を喚起し得ば本懐何物か是に加へん。¹⁶⁾

大倉研が三年余りの歳月をかけて編纂、刊行した『神典』には古事記、日本書紀、風土記、万葉集などが収録されており、古典を通じて日本精神の本質や皇国の歴史を理解することにより、国体の本義を明らかにし、国民に自覚させることを目的としていた。『躬行』第二四号所収「神典のこと」には次のように書かれている。

近頃日本精神や国体明徴の問題が色々に説かれて居りますが、それも確実な根拠に立ち、歴史を明かにしなければ、つまりは空論に終ることになります。国体や日本精神は断じて空な思想の所産ではありません。古く神々

の物語から歴史を一貫してその中に示されるものとあります。こゝに我が古典の有つ重大な意味があります。⁽¹⁷⁾

先に一(一)で述べた通り天皇機関説事件が出来し、国体明徴運動が高まっていく時代にあつて『神典』の刊行は文字通り時宜を得たものとなった。大倉研では『神典索引』を昭和十二年八月に、また『神典解説』の上巻を昭和十三年四月に、下巻を昭和十四年一〇月に刊行し、神典の研究深化、国民一般への繙読の普及を図った。

国体の明徴を目的に編纂されたものとしては文部省が「国体を明徴にし、国民精神を涵養振作すべき刻下の急務に鑑みて編纂した」⁽¹⁸⁾『国体の本義』が広く知られている。文部省は国民が理解しやすい『国体の本義』を編纂し、大倉研は古事記や日本書紀、万葉集など日本にとって重要な古典を総ルビ付きで収録した『神典』を編纂したが、いずれも国体の本義を明徴にするという意図は同じであつた。

しかも、『国体の本義』が昭和十一年四月から編纂事業を開始して昭和十二年三月に発行されたことに比較すると、大倉研による『神典』は『国体の本義』よりも編纂は約三年、発行は約一年先行していた。また、『国体の本義』の編纂のために文部省が組織した編纂委員会は吉田熊次、紀平正美、和辻哲郎、井上孚麿、作田莊一、黒板勝美、大塚武松、久松潜一、山田孝雄、飯島忠夫、藤懸静也、宮地直一、河野省三、宇井伯寿の一四名の編纂委員で構成されていたが、このうち河野と宮地は前述の通り大倉研の『神典』の編纂にも参画していた。国体の明徴に対しても教学刷新事業における大倉研の先取性を見ることができる。このように官に先んじる形で大倉が教学刷新の事業に取り組んでいた事実を鑑みれば、大倉による教学刷新事業は時局に便乗するようなものではなく、自らの信念に基づくものであつたと判断すべきであろう。

(二) 大倉の教学刷新論

縷々述べた通り在野の身でありながら大倉は、自らが創設した大倉研を通じて教学刷新を推進していったが、そもそも教学刷新についてどのような考えを抱懷していたのか。以下では大倉の教学刷新論について考察する。

辛未同志会での報告

大倉の教学刷新についての考えが明確に展開されるのは辛未同志会での二つの報告である。辛未同志会を取り上げた研究は寡聞にして知らず、辛未同志会がどのような組織であったかが解明できるだけの資料を現時点で見つけられていないが、『昭和一五年一月一日現在 辛未同志会会員名簿 並趣意書、規約』に収録されている趣意書（昭和六年八月）には次のように書かれている。

政党政派の外に超越して一の研究団体を組織し、国家觀念の徹底、道義心の振興、国家存立の確保、國際正義の実現を目的として、最も今日の時務に適切なる対策を講じ、或は政府に進言して其の実行を促し、或は国民に宣伝して國論を鼓舞し、進んで國際正義の実現を対外的に高調せんとす。¹⁹⁾

辛未同志会の理事長は清浦奎吾、副理事長は大隈信常、筑紫熊七、永井松三の三名であり、昭和一五（一九四〇）年一月一日現在で二二八名の会員を擁していた。研究団体を標榜しているものの発行物の内容を見る限りは、むしろ国家主義の色彩が強い政治的な団体であったと見られる。辛未同志会は第一部（総務）、第二部（政治、經濟）、第三部（教育、思想）、第四部（外交、国防）の四部門に分かれ、大倉は五〇人以上いる理事（規約によれば当該問題の調査、研究記録発案発表等を分担）の一人であり、第一部と第三部に所属していた。

大倉はこの辛未同志会で昭和八年九月に大学の改革について報告を行い、昭和一一年二月には教学刷新について報

告を行った。また、大倉は天皇機関説問題についてもいち早く反応し、昭和一〇年三月四日に辛未同志会で「美濃部博士憲法思想の謬見」を吐露しており、同年三月二〇日に赤池濃の「天皇機関説と外国憲法との関係」とともに同会から小冊子が発行されている。

大学の改正に就て（昭和八年九月の辛未同志会での報告）

昭和八（一九三三）年九月の辛未同志会における報告「大学の改正に就て」⁽²⁰⁾の中で、大倉はまず、東京帝国大学の聴講生として通学した際に大学内の組織、運用、教授の態度、学内の学風等について不満があり、爾来これが頭を離れず、動機の一つとなって大倉精神文化研究所を設立したと述べている。既存の大学についてその在り方を問題視する点ではこれも文部当局や精研と共通する姿勢を持っていた。

大倉は教育改革のためには最高学府にあつて歴史的に最も古い東京帝大の改善が目下の急務であると考え、東京帝大の存在理由や現状を考察する。大倉は明治二（一八六九）年に大学に下された「達」にある「神典国典ニ依テ国体ヲ弁ヘ兼而漢籍ヲ講明シ実学実用ヲ成ヲ以テ要トス」を紹介し、帝国大学創立の趣旨が神典国典の研究を主として、国体を弁えしむることがその第一義であつたことは明らかだと述べるが、ここにはまさに国体を第一に考える大倉の基本的考え方がよく現れていた。

至尊の軫慮、一般国民の期待に対し、学生の大多数は自由放逸の思想の持ち主かマルクス主義を奉ずる反国家主義者でなければ個人主義的功利主義者と見ても差し支えがないくらいに思想が悪化していることを大倉は問題視する。左傾思想を善導するに足る大学教授の人格と思想とが要望されてくるのに対し、大学教授の人格や国家思想等は敢えて顧みられずにただ知識を偏重しており、反国家思想を主張し、教授の自由を唱えているものもいることを大倉は指

弾した。

更に大倉は官制の上より観た総長と文部大臣の關係について言及し、「総長は文部大臣の監督の下にあることよりして、今一層大学の改革が文部大臣によつてなされなければならないし、又当然為し得られるものであります」と断言する。また、大学令についても大正七（一九一八）年十二月發布の大学令第一条にある「大学ハ国家ニ須要ナル學術ノ理論及応用ヲ教授シ並ニ其蘊奥ヲ攻究スルヲ以テ目的トシ兼テ人格ノ陶冶及ヒ国家思想ノ涵養ニ留意スヘキモノトス」を強調した。この大学令に見られる国家主義的な大学の在り方は大倉が大倉研を通じて教学刷新事業を推進していく上での一つの理念をなしていた。

さて、大倉は東京帝大における日本固有文化講座数の欠如を具体的な数字で提示し、東京帝大においては、全講座数二七一に対して日本文化固有講座はわずか七しかないこと、全教授科目数一五一九に対して日本固有文化に関する教授科目はわずか三九にとどまること、教授から助手、副手までの教職にある者九七一人のうち日本固有文化に与る者はわずか三一人に過ぎないこと、経費の観点からは諸俸給合計一、九〇三、六二九円に対して日本固有文化関係者のそれは四〇、三五五円で全体の二分一厘に過ぎないことを指摘した。

大倉は以上のように現今の大学の抱える問題を述べた上で、辛未会教育思想委員案として、①日本固有文化講座の増加拡張、②教授の改善、③学生の縮減、④祝祭日特に四大節の意義徹底、⑤学生の自覚と規律節制、⑥綜合大学の意義徹底を提言した。

大倉のこのような大学改革案で注目されるのは日本固有文化講座を重視している点である。東京帝国大学の実情を数値面で示した上で、「東京帝国大学に於ける日本固有文化講座を調査するに、実に貧弱である。是では学生の国体觀念の涵養人格の陶冶の如きは思ひもよらず、或は反国家的主張を有するものが出で、現に共產党検挙に依て起訴さ

れたるものが相当にあるのは、寔に所以ありと思はれる。依て文学部以外の学生も、日本固有文化科目の若干を必修科目として履修することを提唱すると共に、固有文化講座、特に国史、古典講座の充実を希望する⁽²³⁾と総括、提案した。これは昭和十一年から実施されることになった「日本文化講義」の趣旨を先見したものと解釈できる。つまり天皇機関説事件や国体の明徴問題以前に大倉は日本文化講義の必要性を認識していたのである。

先に一(二)で述べた通り、実際に東京帝大のみならず帝国大学、官立大学、高等学校、高等専門学校など文部省直轄諸学校に加え私立の大学、高等専門学校においても日本文化講義が昭和十一年度より実施されることになった。また、京都帝大では昭和十二年二月に「日本精神史講座」が文学部に設置され、東京帝大でも昭和十三年一月に「日本思想史講座」が文学部に新設された。東京帝大では文部省が主導した「日本国体学講座」が学内での強い名称反対を受け、日本思想史講座という名称で設置されることになったという事情があるが、基本的にこの講座は天下り講座であった。文学部以外でもという大倉の提唱は反映していないものの一部とはいえ、期せずして大倉の提言が京都と東京の帝国大学で実現することになった。

教学刷新に就て（昭和十一年二月の辛末同志会での報告）

既に一(一)で述べた通り教学刷新評議会は昭和一〇（一九三五）年一月に設置されたが、その三ヶ月後に大倉は辛末同志会で「教学刷新に就て」という報告を行った。

大倉は教学刷新が必要であることを認め、教学刷新評議会の趣旨にも賛同する。しかし、その委員の顔ぶれが「殆んど明治・大正の西洋の学問・思想の中に名を成し、国体の本義に無関心なる時代に学問を進め地位を得た人々⁽²⁴⁾」であり、教学刷新の趣旨を遂行するのに当たり適当であるのかという懸念を大倉は示した。この時、大倉が教学刷新評

議会の委員五七名のうち具体的にどの委員について問題としたのかは不明である。ただ、教学刷新評議会は天皇機関説事件が発端となった国体明徴運動が広がる中で軍部の圧力で設置された機関だけにこれを歓迎しない空気が教育界の中にも一部あることを察知した上で大倉はこのような発言したとも推量される。

教学刷新の「教学」は通常では「教育と学問」と解釈されるが、「教学」の「教」の意味について大倉は「抑々教は道を示し、その特殊な国状に即した精神内容を表現するものでありますから、その国に依って特殊なる性質を持つもので、所謂国民文化の意味が、こゝに含まれて居るのであらうと思ひます」⁽²⁵⁾と独自の意見を述べた。

更に「教学」の「学」の概念について大倉は東洋の学と西洋近世の学との間には本質的な相違があるが、明治以来我が国では後者の学のみを偏重して今日に至っていると指摘した上で、日本の現代教育の欠陥についても言及し、「大学の伝統的弊害は国体觀念の欠如と人格輕視の点であり、教授は「教」を弁へずして、「学」を専らにし「教」を忘れて居る。高等学校はこれにならひ、中学教育はやゝその弊害の中なるものと云つてよろしいのであります」⁽²⁶⁾と大学教育に対する強い不満を表明した。こうした弊害に鑑み思想指導の機関として国民精神文化研究所が設立されたことや精研の事業が必要で有意義であることを認めながらも大倉は「多数の学校の欠陥を一小研究所によつて補足しやうとすることは非常な難事であります。寧ろ根本に遡つて、国体に即して学校そのものを刷新することの方が一層急務であらうと信じます」⁽²⁷⁾と国体に即した教学刷新の必要性を強く説くに至った。

大倉が教育改善策としてこの報告の中で披瀝したのは、①大学の数とその学生の数の削減（特に法・文・経の三学部）、②国体の本義を知る上で最も重大な関係を持つ日本古典の学の強化（古典講座を古典学科に改めるなどの施策）、③日本歴史の教育改善（国体に基づき国礎を培養して日本精神を顕揚する歴史教育の方法）、④外国語時間数の整理、⑤一般教育を準備教育から国民教育へと実用化、⑥宗教的情操教育（天照大神即現津御神の信奉の精神を徹底）であ

る。国体の本義に徹した教育であり、教学刷新評議会と同じ方向を目指してはいたが、その提言は教学刷新評議会の答申に八ヶ月先立つものであった。

大倉は文部省の不振を学校行政監督の最高機関でありながら大学に対してその権限を実行することが難事とされている点に求めた上で、最後に陸軍における教育総督部に相当するような「文教院」を設立して権威あるものとし、教育行政についても特に人事行政については文部大臣に進言しうるようにすること、更に元帥府・軍事参議官のような御諮詢をまつて奉答する文教関係の制度を採ることとして、文部省を陸軍省のような地位に置くことが至当であろうと述べ、報告を締めくくった。教学刷新評議会が答申で示し、昭和一二年七月に教学局が設置されたが、大倉は国体の本義に徹した教育を徹底的に展開させるため文部省そのものを強化する施策を構想したのである。⁽²⁸⁾

三 大倉が担当した最初の日本文化講義―北海道帝国大学における三回の講義

(一) 北海道帝大での講師選定の経緯

大倉が最初に担当した日本文化講義は北海道帝国大学における三回の講義であり、昭和一三（一九三八）年六月二七・二八日に同大の中央講堂で行われた。大倉はまず二七日に「日本文化の真髓」という演題で学部学生を対象に講義を行い、続いて翌二八日午前に「日本精神の発揚」という演題で予科生徒を対象に、そして同日午後「日本精神の体認」という演題で実科専門部生徒を対象にそれぞれ講義を行った。

『躬行』第五四号は「大倉山だより」の欄で「一、北海道帝国大学に講義」という小見出しを打ち「北海道帝国大学の招きによつて、六月廿七・廿八の両日同校に於て、予科、本科、実科の各学生に対して、授業時間を割いて、日

本文化の理解、体認、及日本精神の発揚について講演をせられる予定であります⁽²⁹⁾」と大倉の動静を報じている。北海道大学文学書館には教学局と北海道帝大の間の往復文書の綴り等は所蔵されていないため、北海道帝大がどのような経緯で大倉を日本文化講義の担当講師として選定したのか、目下確認ができていない。各校が日本文化講義の講師選定を行う上で参考にできるよう、文部省思想局は昭和十一年夏に「日本文化講義講師表」という講師一覧を各校に送付していたが、この講師一覧に大倉は掲載されていなかった。

北海道帝大では昭和十一年度の日本文化講義の講師に宮内省図書寮編修官の樹下快淳、東京帝国大学教授の塩谷温、東北帝国大学教授の中川善之助を、昭和十二年度は京都帝国大学教授の野上俊夫を選定しており、帝大教授から講師を選ぶ傾向があった。学長職にあるとはいえ帝国大学ではない東洋大学の大倉が選ばれたことには些かの疑問が残るが、大倉と北海道帝大を結ぶ決定的な手がかりは今のところ見つけることができていない⁽³⁰⁾。

『大倉邦彦先生献呈論文集』（躬行会、昭和十七年）にある「大倉精神文化研究所沿革年表」の「大倉所長の動き」欄では昭和十一年から「本年中に於ける講演回数」が記されるようになったが、それによれば大倉の講演回数は昭和十一年は三五回、十二年は三一回となっており、東洋大学長に就く前後より講演が増えたことがわかる。それとともに大倉の名前が浸透していき、北海道帝大での講師選定に挙がることになったとしか現時点では推測できない。

ただ、大倉に対する日本文化講義の講師依頼は北海道帝大側の事情がわからないものの急なものであった。大倉精神文化研究所附属図書館に所蔵されている同所の『日誌』では、教学局あるいは北海道帝大から講師の打診を受けた記録は確認できない。しかし、同図書館には北海道帝大学生課長・尾崎卓郎が大倉に宛てた日本文化講義の講師依頼の書簡（大倉精神文化研究所沿革史資料No.3397）が所蔵されている。この書簡は速達にて発信され、日付及び封筒の消印は昭和十三年六月四日であり、大倉が日本文化講義を行った六月二十七日の二三日前であった。「甚だ唐突な

る御願ひには御座候へ共来る六月下旬に於て貴殿に御講演御願ひ申上度候」という書簡中の文言が語るように大倉への講師依頼には性急さが感じられる。大倉の講師選定には当初予定していた講師の都合が悪くなり、急遽大倉に白羽の矢が立ったという背景があつた可能性も考えられる。

（二）講義録に見る大倉の日本文化講義の概要

大倉が北海道帝大で行つた日本文化講義の講義録は同大学生課が発行した四九頁からなる小冊子『日本文化講義』第五輯（昭和一四年三月二七日発行）に収録されている。以下ではまずこの講義録を基に大倉が初めて担当した日本文化講義がどのようなものであつたのか、その概要を見ていく。

第一講「日本文化の真髓」

学部学生を対象とした第一講で、大倉はまず満州事変以後、日本文化や日本精神の研究が流行してきたということから話を始め、外国の文物を取り入れてきた日本の過去を聖徳太子の時代より振り返つていった。大倉によれば、日本人が外国文化を採り入れる時にそれを炯眼を以て判断し取捨選択するということは日本文化の真髓を体得しているからこそできることになる。日本人には外来思想を鵜呑みにするという欠陥があることを指摘し、大倉は明治維新について神武のいわゆる肇国の精神に則りながら国体の本義を明らかにし天皇政治に還つたものだとした。その上で明治時代における西洋の思想による教育が外国文化を尊敬し、それに傾倒させることを通じて日本の文化の真髓というものを忘れることになったと学界の状況について憂慮を示した。

大倉は「知識階級として国民の上に立つ人は本当の日本の国体、文化の真髓を明かにして場所動機に應じてその仕

事をやつて行くことにならなければならない。そこに即ち皇運扶翼の途がある訳であります⁽³²⁾と説く。大倉によれば日本文化の真髓骨髓というものは「神にまします 天皇を戴くといふ信念即ち神皇信奉の信念⁽³³⁾」である。大倉は憲法を主にして政治を行うにしても、眼に見えない根本の祭政一致の精神が基調にならなければならないとし、天皇は神に在すという信仰、その大御心を奉戴しその神徳を宣揚する国民としての祭りの意義を強調した。そして、支那事変を契機として日本文化の真髓を世界的に発揚するよう考えて頂くことをお願いしたいと述べ、第一講を結んでいる。

第一講の基調をなすのは万世一系の天皇を信奉し、日本を神国と考える思想である。今日の科学的見地からは合理性に欠ける主張として一掃されようが、教学刷新という当時の視点に立てば、大倉の主張は教学刷新評議会が昭和一一（一九三六）年一〇月に出した答申にある「我が国ニ於テハ祭祀ト政治ト教学トハ、ソノ根本ニ於テ一体不可分ニシテ三者相離レザルヲ以テ本旨トス⁽³⁴⁾」という考え方を踏襲したものであり、穏当という評価にもなるう。

第二講「日本精神の発揚」

予科生徒を対象に行われた第二講で大倉は「御民われ」という表現を用いた万葉の歌人・海犬養宿禰岡麻呂の歌の紹介から始めた。「我が国に於きましては、歴史の根本、人間の生きる根本、一切の根源は、天照大神と御一体の神にまします 天皇に仰ぎ奉るのであります、天皇の御為めに、吾々は尊く生きると云ふ臣民としての自覚を欠いては、日本人としての最悪の墮落であります⁽³⁵⁾」と大倉は断じ、神皇信奉を旨とする臣民道を展開した。

各種の自我中心の欲を棄てるにはどのようにすればよいのか。これが日本精神を発揚しようとするための一つの努力であり、西洋の個人主義、功利主義、自由主義などの誤った思想から離れ、自我中心の欲を捨てて君国の為に尽くす精神に立ち帰らねばならないと大倉は説いた。無我の奉仕を唱える大倉によれば日本精神の発揚は理論よりも実践、

すなわち頭で考えるのではなく身体でもって修養することが必要であった。ここには、西洋の学問への偏重を戒め、西洋流の個人主義や功利主義、自由主義を斥け、日本精神を顕揚し国体の本義に徹した教育を説く大倉の教学刷新論が反映していた。

更に大倉は利益中心に生産する西洋式の産業の行方は日本精神に合致せず、日本精神によるところの産業の指導精神と形態を採ることによってのみ日本産業に永遠の基礎を与え、これを世界に雄飛せしめることができる」と述べる。従来の西洋流の功利主義、自由主義の考え方は、あらゆる面において清算されなければならない、その上に新しく日本精神による高度の指導原理を確定しなければならない。

大倉は最後に「本学の如き学校こそ本当に行学一致知目行足であると思ふ⁽³⁶⁾」と述べ、仏教の概念である行学一致や知目行足に触れ、抽象的な知識は行の裏付けがなければならないことや天皇の御民であるところの日本人だということ、自覚の上に立つには修養修行による体験の深化にまたねばならないと説き、第二講を結んだ。

第三講「日本精神の体認」

実科専門部の生徒を対象とした第三講では大倉は日本精神の体認について話を進めた。ここで大倉が重視したのが産霊（むすび）の思想である。大倉は造化の三神の一つである天之御中主神から天照大神の出現までの日本古来独得の思想を説明した。「天照大神の御本質としては、実に天地宇宙化育発展せしめ給ふ神であり又一面天皇の御先祖であり御一系にましまし、その御神徳を享けさせ給ふ現御神として君臨し給ふのであります。現御神にまします天皇陛下は矢張り天照大神の御神徳を現実に御発揚遊ばすのであります⁽³⁷⁾」と述べた上で、大倉は天皇の御稜威について

「日本は世界のこの行詰りを打開し東西両洋文明文化を摂取し綜合して実に輝かしい新文明新文化を創造し、之によつて世界に貢献する」ことだとする⁽³⁸⁾。

大倉は仕事に対する態度に敬虔の念を持たねばならぬこと、物のできる産靈の神の働きに合流してそれを妨げることなく助けてその摂理に従つて仕事をしていかねばならないことを説き、「時恰も日本は国家総動員で向ふの戦線に行てゐる人ばかりが国のためぢやない、われわれ国民全体が戦線に立つてゐるやうな気持でその仕事を通して御国のために尽すことが本当の日本精神である、それこそ日本精神を仕事の上に体認して築き上げてゆくことになるわけがあります⁽³⁹⁾」と日本精神の体認による報国を訴えた。大倉によれば体認とは身体を通じて掴みこれを体現するということであり、修練、行であつた。

最後に大倉は第二講と同じく知目行足で知と行とが一つにならなければならないことを指摘し、「新日本の建設と云ひ東亜協同体の確立と云ふも、之からの若い人の仕事であります。時勢は人を生むのであります。この時勢を達観し認識してその解決の根本として日本精神体認への道を歩み出して頂き度い。かくして皇運扶翼の道は自づからそこに燃え出して来るものと思ひます⁽⁴⁰⁾」と述べて第三講を終えた。

(三) 大倉による講義ノートの準備

大倉研附属図書館には大倉が昭和一三（一九三八）年六月に北海道帝大で行つた講義ノートが研究所沿革史資料として所蔵されており、第一講、第二講、第三講それぞれに分けて綴られている。ここではこの講義ノートの構成を示すことにより、初めて日本文化講義を担当するに当たり大倉がどのような準備を行つたかを概観する。

第一講の講義ノート

「大倉邦彦講義ノート 第一回（学部） 日本文化の真髄 廿七日午前十時半～十二時半」（大倉精神文化研究所沿革史資料 No.4511）は次の通りである。

【構成】

- (IA) 手書きメモ (一枚) 題目「第一回学部、日本文化の真髄（廿七日）」
- (IB) 手書きメモ (一枚) 題目「学部」日本文化の真髄」
- (IC) 手書き原稿 (一二枚) 題目記載なし
- (ID) 手書き図書目録カード (一枚) 題目「菅家遺識」
- (IE) 原稿用紙への貼付 (二枚) 「日本人の根本信念」(『躬行』第五号、昭和九年七月、二～三頁)
- (IF) 原稿用紙への貼付 (四枚) 「祭政一致」(『躬行』第三五号、昭和十二年一月、一～四頁)
- (IG) 原稿用紙への貼付 (七枚) 「神国の政治」(『躬行』第三九号、昭和十二年五月、一～七頁)
- (IH) 原稿用紙への貼付 (四枚) 「祭政一致」(『躬行』第三五号、昭和十二年一月、五～八頁)
- (II) 原稿用紙への貼付 (七枚) 「日本人の根本信念」(『躬行』第五号、昭和九年七月、四～一〇頁)
- (IJ) 手書きメモ (一枚) 題目「比較国体論」
- (IK) 手書き原稿 (五枚) 題目「日本民族性の尊さ」

【所見】

第一講の講義ノートは実際の講義でそのまま読みあげるための講義原稿というよりも講義で話す内容に関連した諸資料を取り纏めたものであった。レジュメ、目次案に加え、雑誌『躬行』からの切り抜き、手書きの原稿、カード、

メモなど雑多な構成である。

(IA) は「明治大正欧米文化吸収時代の成功」、「明治維新の精神と明治五年以後の状況」、「日本精神の擡頭」などの項目が列挙され、各項目に続き、「軍事、産業」、「森有礼」、「諸説は神皇信奉に帰一」など、講義の中で言及すべきキーワードと思われる言葉が書かれている。更に「祭政一致（日本文化の真髓）」と記した上で『躬行』第三五号所収「祭政一致」三頁の図（神国日本のあるべき姿として描いた図）を貼り付け、加筆修正している。講義のレジュメもしくは進行メモとも呼べるものであり、これにより講義内容の整理を図ったものと見られる。

(IB) は「(一) 日本文化の動向」、「(二) 日本文化建設の指導原理」、「(三) 支那事変の文化史的意義」のように漢数字が付されていることから講義の目次案だと考えられる。

(IC) は題目が記載されていない一二枚の原稿である。『躬行』所収の大倉の論考や『放送処世信念』（昭和二年）、『勤勞教育の理論と方法』（昭和十三年）との照合を行ったが、現時点では既発表論考の原稿であるとの確認は取れなかった。第一講を行うためだけに用意した原稿である可能性がある。

(ID) は『菅家遺誠』の巻一より和魂漢才が説かれる最後の条の直前にある「凡神国一世無窮之玄妙者不可敢而窺知雖学漢土三代周孔之聖經革命之風深可加思慮也」を返り点を付して記したものである。講義時の備忘のものであるろう。

(IE) (II) はいずれも『躬行』掲載の論考を切り取り、そのまま原稿用紙に貼り付け、一部の箇所には赤鉛筆で傍線を引いたものである。講義時の備忘のものだと推量される。

(IJ) は「○支那〓君主天命説―易姓革命（菅家遺誠）、○西洋〓君權神授説」と書かれたメモである。国体論の比較を整理したものであり、これも講義時の備忘のものであるろう。

(I K) は「日本民族性の尊さ」という題目の原稿五枚である。『躬行』所収の大倉の著作や『放送処世信念』、『勤勞教育の理論と方法』との照合を行ったが、現時点では既発表論考の原稿であるとの確認は取れなかった。(I C)と同じく、第一講を行うためだけに用意した原稿である可能性がある。

第二講の講義ノート

「大倉邦彦講義ノート 第二回(予科) 日本精神の發揚(臣民道) 廿八日午前十時半～十二時半」(大倉精神文化研究所沿革史資料 No.4512) は次の通りである。

【構成】

(II A) 手書き原稿(一二枚) 題目「予科 第二講 臣民道」

(II B) 原稿用紙への貼付(二八枚) 「第二講 無我の奉仕」(『放送処世信念』二三～四〇頁)

(II C) 原稿用紙への貼付(八枚) 「第六講 臣民道」(『放送処世信念』一〇九～一二六頁)

(II D) 原稿用紙への貼付(二三枚) 「第三講 目標を高く持て」(『放送処世信念』四六～五八頁、五枚目には更に「流行思想より信念へ」(『躬行』第四九号、昭和一三年二月、七～八頁)より「四葉隱武士の煙仲間」を貼り付け)

(II E) 手書き原稿(二二枚) 題目「当世氣質」

(II F) 原稿用紙への貼付(二〇枚) 「国民精神総動員を阻む伏兵」(『躬行』第五〇号、昭和一三年三月、一～二〇頁)

【所見】

表紙に当たる紙には「日本精神の発揚」の後に「臣民道」と括弧書きで書かれている。第一講と同様に実際の講義でそのまま読みあげるための講義原稿というよりも講義で話す内容に関連した諸資料を取り纏めたものである。第一講の（ⅠＡ）、（ⅠＢ）に相当する第二講全体のレジュメや目次案と思しきものは含まれておらず、『放送処世信念』や『躬行』からの切り抜き、手書きの原稿から構成されていた。

（ⅡＡ）は『放送処世信念』所収の「日本精神と産業」（東京工場協会主催の職長修養会で昭和十一年八月一日に行った講義の速記原稿）と内容的に重複しているところも多いが、原稿の八枚目に「第一講に於て述べました通り」を朱線で抹消している記載があるところから判断すれば第二講の原稿として用意されたものである可能性が高い。

（ⅡＢ）（ⅡＤ）はいずれも『放送処世信念』を切り取り貼り付けたものに黒ペンや赤鉛筆で削除、加筆、修正を施したものである。恐らくは講義時の備忘を目的に準備したものである。複写機が普及していなかった時代とはいえ、書籍の頁は当然のことながら両面印刷ゆえ、書籍から切り取り貼り付けるためには同じ書籍二冊を潰す必要がある。その費用や手間を踏まえると、この日本文化講義に対する準備を大倉は相応に重視していたものと考えられる。

（ⅡＥ）は『躬行』第五四号（昭和十三年七月、一〇一頁）掲載の「当世氣質」と内容がほぼ同一であることから、その原稿と見られ、『躬行』で見出しになる言葉が赤鉛筆で囲まれていた。（ⅡＢ）（ⅡＤ）と同じく講義時の備忘のために準備したものであろう。

（ⅡＦ）は『躬行』掲載の論考を切り取りそのまま貼り付け、黒ペンで一箇所加筆をしたものである。これも講義時の備忘用であらう。

第三講の講義ノートの構成

「大倉邦彦講義ノート 第三回（専門部） 日本精神の体認 廿八日午後一時半～三時半」（大倉精神文化研究所沿革史資料 No.4513）は次の通りである。

【構成】

- （ⅢA） 原稿用紙への貼付（三枚） 「第三講 目標を高く持て」（『放送処世信念』四三～四五頁）
- （ⅢB） 手書き原稿（三枚） 題目「純粹知―活動知―実践知―創造知」
- （ⅢC） 手書き原稿（四枚） 題目「理智は鏡の表、行は鏡の裏」
- （ⅢD） 手書き原稿（三枚） 題目「知と行と道」
- （ⅢE） 手書き原稿（二枚） 題目「聞・思・修」
- （ⅢF） 手書き原稿（一枚） 題目「客觀的抽象論と体現的実証」
- （ⅢG） 手書き原稿（一枚） 題目「実行の尊さ 無私の行為 功德」
- （ⅢH） 手書き原稿（四枚） 題目「感得、体認（学と行）」
- （ⅢI） 切り抜き（三枚） 今泉定助「文献と行事」（『日本精神叢説』第一集、昭和八年、一～六頁）
- （ⅢJ） 手書き原稿（二二枚） 題目「修養」
- （ⅢK） 切り抜き（五枚） 「水車の如くに」（『躬行』第一〇号、昭和九年二月、二～一一頁）
- （ⅢL） 手書き原稿（一六枚） 題目「現実刻々の場所が道場 労働奉仕」
- （ⅢM） 手書きメモ（七枚） 一枚目は題目なし、二～五枚目は題目「元寇下時宗」、六・七枚目は題目「時宗ノ臆病」
- （ⅢN） 切り抜き（六枚） 「航空・航海と人生行路」（『躬行』第四一号、昭和一二二年七月、一～一一頁）

(ⅢO) 小冊子「日本産業道」(『躬行』第五一〜五三号、昭和一三年四〜六月、所収の「日本産業道(一)〜(三)」の合冊)

【所見】

第三講についても第一講・第二講と同じく、実際の講義でそのまま読み上げるための講義原稿というよりも講義で話す内容に関連した諸資料を取り纏めたものだと考えられる。第二講と同じく、第一講の(ⅠA)、(ⅠB)に相当する第三講全体のレジュメや目次案と思われるものは含まれていない。『躬行』や『放送処世信念』からの切り抜きもあるが、自分の著作ではない今泉定助の著作の切り抜きがある点が注目される。また、第一講・第二講と比べ手書き原稿の枚数が遥かに多くなっている。

(ⅢA)は(ⅡB)〜(ⅡD)と同じく『放送処世信念』を切り取り、原稿用紙に貼り付けたものであり、見出しの「第三講」と一〜二行目を黒ペンで削除したものである。これが一番上に綴じられていることから講義の冒頭で話す内容として準備されたものと思われる。

(ⅢB)、(ⅢC)、(ⅢE)、(ⅢF)、(ⅢH)は『勤労教育の理論と方法』と照合した限りではいずれも内容的に重複している箇所が多く、同書の原稿である可能性が極めて高い。いずれも講義時の備忘のものであろう。

(ⅢJ)と(ⅢL)は内容的に『放送処世信念』の記述と重なっており、その原稿と見られるが、(ⅡB)〜(ⅡD)や(ⅢA)のように『放送処世信念』から直接切り取り、貼り付けることをしなかった理由は不明である。これも講義時の備忘用と推測される。

(ⅢD)は「知と行と道」という題目の原稿三枚、(ⅢG)は「実行の尊さ 無私の行為 功德」という題目の原稿一枚であるが、いずれも現時点では何の原稿であるか特定はできなかった。講義時の備忘のものであろう。

(ⅢI) は『日本精神叢説』第一集(昭和八年)の今泉定助の「文献と行事」をそのまま切り抜いたものである。内容的に外れるためか六頁の最後の三行は黒ペンで削除され、また赤鉛筆で傍線が施された箇所も多い。これも講義時の備忘用であろうが、大倉が自分の手書き原稿や既発表の論考ではなく、他者の著作をこの日本文化講義の「講義ノート」の中に取り込んだのはこの今泉の「文献と行事」だけに限られている。神道論において今泉が大倉に深い影響を与えていたことが示唆される。⁴¹

(ⅢK) と(ⅢN) はいずれも『躬行』からそのまま切り抜いたものであるが、前者は特に加筆・修正・削除はなされていないのに対して、後者は赤鉛筆での囲みや加筆が見られる。いずれも講義時の備忘のものと考えられる。

(ⅢM) の一枚目は「無明↓煩惱↓所知障」や法輪、食輪などの文言が書かれ抽象的であるが、二枚目以降は時宗の元寇での対応や無学祖元との問答などが記されており、講義時に言及する際のメモとして用意したものであろう。

(ⅢO) は『躬行』発表の「日本産業道」を合冊した小冊子であり、見出しや小見出しに対する赤鉛筆での囲みなどが確認できる。講義時の備忘用と推測される。

講義ノートの所見の総括

第一講から第三講までの手書き原稿やメモ、著作からの貼り付けなどを全て合わせると原稿用紙の枚数は優に二〇〇枚を超える。北海道帝大では昭和一一年度の日本文化講義の開始から学部、予科、実業専門科と分けて講義を実施しており、昭和一二年度は野上俊一が一人で三種類の講義を行った。大倉が担当した昭和一三年度も前年度の実施方法を踏襲したものと思われる。各種講演やラジオ講座の担当経験があるとはいえ、帝国大学において二日間て二時間ずつ三回にわたり異なる演題で講義を行うことは大倉にもある程度の負担になったと見られ、入念な準備の下、各講

ごとの「講義ノート」を用意することになったと考えられる。

(四) 講義録と講義ノートの比較

ここでは大倉研の沿革史資料である「講義ノート」と先に三(二)で概要を確認した『日本文化講義』第五輯(以下、「講義録」と呼ぶ)の比較検討を行い、大倉による講義準備がどの程度実際の講義に反映したかを見てみたい。

第一講「日本文化の真髄」の検討

第一講のレジュメと思しき(ⅠA)には図も含まれているが、骨子のみを取り出した目次案と思われる(ⅠB)は次のような構成になっていた。

(一) 日本文化の動向

神・儒・仏三道及び西洋の学
総合、創造、建設の時代へ

(二) 日本文化建設の指導原理

神皇信奉、祭政一致、顕幽一致、

比較国体論

神皇ト外国君主
人為的契約国家ト神ノ国

(三二) 支那事変の文化史的意義

日本文化の将来性

学生の覚悟

(一・二)のうち「神・儒・仏三道及び西洋の学」については講義録において論の展開が見られるものの、「総合、創造、建設の時代へ」についてはほぼ言及がない。(二・三)についても神皇信奉、祭政一致、顕幽一致に関しては述べているが、比較国体論については「神皇ト外国君主」、「人為的契約国家ト神ノ国」といった形での詳細な言及はない。(三・三)については日本文化の将来性までは触れておらず、最後に学生の覚悟を僅かに語っている程度である。時間の制約のためか当初の予定よりも話す内容を絞り込まざるを得なくなった可能性がある。

(一・四)では日本文化の究明拡充が満州事変以後叫ばれるようになったこと、日本の軍事・産業が世界の驚異とされるまで進歩したこと、文明は文化を基礎として始めて独特の力強い性能と生命を持つものであること、我が国の文化は長い歴史の間に仏教を取り入れ、儒学を吸収し、日本仏教、日本儒教となり、また西洋の諸学を学んではその粹を取るよう努力していること、すべての外来文化を日本化するところの原理であり力であるものは固有の日本文化であること、などが述べられており、講義録と照合した限りでは講義にある程度反映されていた。

(一・五)「菅家遺誡」については講義録に書き下し文があり、和魂漢才にも触れられている点から見て講義に反映されたことは間違いない。講義録との対比では、(一・六)・(一・七)もその主題である「神皇信奉」、「神社の祭神」が講義の終盤に言及されており、また(一・八)・(一・九)の主題である「祭政一致」についても講義の中で詳しく語られていた。

他方で（ⅠＧ）については主題である「日本精神と法律」、「神政扶翼」の内容は講義録では十分に言及されておらず、（ⅠＪ）についても比較国体論として、支那Ⅱ君主天命説、西洋Ⅱ君權神授説と書かれているが、これらについての言及はなかった。

（ⅠＫ）に関しては「神国日本を神国日本たらしめるべく、国民こぞつて「敗けじ魂」を養つて、それぞれの任務を果さねばなりません」という結語から見て（ⅠＡ）で構想した「学生の覚悟」に反映させる予定であったと思われるが、講義録を見る限りは十分に反映されているとは言えず、むしろ（ⅠＫ）に登場する明治天皇の維新の勅語の話や結語の内容は第二講に反映されていた。時間切れにより第一講では詳しい説明には至らず、第二講に話を回した可能性がある。

第二講「日本精神の發揚」の検討

第二講の講義ノートのうち（ⅡＡ）は海犬養宿禰岡麻呂の歌を紹介し、「御民われ」に着目している点が講義録と一致していることに加え、「臣民としての自覚を欠いては、日本人としての最悪の墮落」という表現や天皇が臣民を「大御宝」と言った事実の指摘などが講義録とも一致しており、全面的にとまでは言えぬもののある程度講義に内容が反映されていたと言えよう。

（ⅡＢ）についても建長寺官長・誠拙和尚の挿話などが講義録に盛り込まれており、『放送処世信念』の「第二講 無我の奉仕」に沿った内容で講義が行われたことが確認できる。（ⅡＤ）の『放送処世信念』の「第三講 目標を高く持て」は『葉隠』から引いた奉仕の心得や日本精神の根底に流れる君の御為め、国の為めについての言及、西洋の個人主義、功利主義、自由主義から国民の伝統精神である君の御為めに己を空しうするという精神に立帰る必要があ

る議論など、記述のかかなりの部分が講義録と重なっており、その内容は講義に十分に反映されていた。

他方で(ⅡC)と(ⅡE)は無関係とまでは断じられないものの講義録との表現の重なりが見られず、講義に反映されたとは言い難い。(ⅡF)も人民戦線や思想戦の話はなく、内容的にはほとんど講義録と重なっていないかった。

むしろ第二講の中盤で展開するアダム・スミスの自由放任主義やベンサム、ジョン・スチュアート・ミルの功利主義、マルクス思想の批判的紹介などは、大倉が第三講の「講義ノート」として準備した(ⅢO)に含まれる「日本産業道(一)」「躬行」第五一号)に出てくる記述と同じであり、欧米流の株式会社の話も(ⅢO)に含まれる「日本産業道(二)」「躬行」第五二号)と内容的に重なっており、(ⅢO)は明らかに第二講に反映されていた。

また、第二講の終盤で大倉は「人間Ⅱ(肉体+知識経験+持物)×X」という式や「日本人Ⅱ霊肉+霊智+神ノ預り物」という式を持ち出して日本人論を展開するが、そこでは第三講の「講義ノート」にある(ⅢN)すなわち「航空・航海と人生行路」「躬行」第四一号)の記述がそのまま使われていた他、同じく第三講の「講義ノート」にある(ⅢE)に登場する伝教大師の話が第二講の最後で語られていた。

更に第二講で大倉は文献の研究と行事について説明し、抽象的な知識だけではだめであり、行の裏付けが必要であるという行論をなしたが、そこには第三講の「講義ノート」に含まれる(ⅢI)すなわち今泉定助の「文献と行事」(『日本精神叢説』第一集)の影響が認められる。

第二講の講義ノートで準備した内容だけでは時間が余るため第三講の講義ノートとして準備した内容も取り込んで論じることになったのか、話の勢いで第三講の講義ノートとして準備した内容にまで踏み込むことになったのか理由は不明であるが、第二講には第三講の講義用に準備された内容が相当程度混入することとなった。

第三講「日本精神の体認」の検討

第三講の(ⅢA)は講義録との重なりが確認できず、実際の講義に十分に反映されなかったものと見られる。(ⅢB)で言及されている純理論、活動知、実際知、創造知という言葉は第三講の講義録の終盤に登場し、講義に反映されていることが確認できた。(ⅢD)に関しても知と行の一致については講義録の終盤に見出すことができ、講義に一部反映されていた。

しかし、(ⅢC)は講義録の内容と重なるところがほとんどないことから講義に反映されたとは言い難く、(ⅢE)についても前述の通り第二講の講義内容には反映されたものの、第三講では反映されなかった。

また、(ⅢF)、(ⅢG)、(ⅢH)、(ⅢJ)も講義録と比較する限りでは講義に内容がほとんど反映されていないと判断される。これに対し、今泉の「文献と行事」の切り抜きである(ⅢI)については行や実践躬行への言及など若干ではあるが内容が講義に反映されており、(ⅢK)についても彫刻の名人・梓慶の挿話が講義の中盤で語られており、第三講への反映が認められる。

(ⅢL)、(ⅢM)は講義録との記述の重なりが確認できず、講義に反映されたとは言い難いが、(ⅢN)については飛行機研究についての記述が講義録の終盤に確認できることから、ある程度第三講に反映されていたと言える。ただし、(ⅢN)については前述の通り日本人公式などむしろ第二講への反映が多かった。

(ⅢO)のうち「日本の産業道(一)」における「日本精神の根本」や「日本の産業道(二)」における「ムスビの働き」については、全面的とは言えないまでも第三講の講義録の序盤にある「産霊(むすび)」や「天皇の御稜威」の話に一部似た記述を確認することができ、ある程度講義に反映されたものと考えられる。

総じて第三講の講義ノートについては第一・二講と比べ講義録と直接的に関係した記述が少なく、大倉が第三講の

準備として揃えた資料が実際の講義では十分に活かされたとは言い難いという結論になる。第三講の冒頭で大倉は「今日は講義にもなりません、昨日今日来日本精神といふやうなことに就きましていくらかお話を申しましたのに続いて話を進めてみたいと思ひます」と話しており、実際に第一講、第二講と比べれば話は短かった。⁴²⁾ 第三講で話す予定にしていたことをある程度第二講で話してしまい、話の展開上、第三講では予定していた内容を変えざるを得なくなったというような事情が生じた可能性もあろう。

四 大倉によるその後の日本文化講義

(一) 昭和一四年度以降に担当した日本文化講義

昭和二三（一九三八）年度に担当した日本文化講義は北海道帝大における三回のみであったが、大倉は昭和一四年度以降も日本文化講義を担当した。⁴³⁾ 昭和一四年度は三回担当し、五月一八日に新潟高校で（演題「日本文化ノ真髓」、六月二九日に山梨高工で（同「日本文化ノ根幹」、一〇月五日に仙台高工で（同「皇国ノ基体ト外来文化」）日本文化講義を行った。

昭和一五年度における大倉の日本文化講義の担当は四回であった。五月六日に神戸高工で（演題「肇国精神ト外来文化」、五月七日に京都高工で（演題不明）、六月八日に高岡高商で（演題「日本文化ノ中軸」、一二月二五日に七高で（同「日本精神ノ中軸」）講義を担当した。

昭和一六年度についても日本文化講義を四回担当することとなり、大倉は五月三日に東京商船で（演題「日本精神ノ具体性」、五月二九日に米沢高工で（同「日本文化ノ根幹」、五月三一日に新潟医大で（同「現御神信奉ト日本文

化」)、六月三〇日に東京農教で(同「日本精神ト外来思想」)講義を行った。

昭和一七年度は昭和一八年一月二二日に浜松高工で行ったこと(演題「日本文化の中核」⁽⁴⁵⁾)のみが現時点では確認できている。

大倉精神文化研究所の昭和一四年度の『事業報告』では大倉の講演について次のように記されている。

国家総動員の体制強化に伴ひ大倉所長の講演を要望せられる向は益々増加しつゝあり。所長は之等の講演に於て夙くより抱懷されし日本精神論、国体の本義、臣民道の普及徹底に主力を注がれたが、特に本年度に於ては産業報国運動方面に於ては産業報国聯盟参与及び東京地方産業報国聯合会顧問として独特の日本産業論を著書(日本産業道)及び諸説により普及せられた。尚文部省教学局主催の高等専門(ママ)〔門〕学校に於ける「日本文化講義」及び各府県国民精神文化講習会にも出張講演あり、その足跡ほとんど全国に及びり。⁽⁴⁶⁾

なお、日本文化講義と同じく官製講義として昭和一五年度から開始された「産業報国精神特別講義」の講師を大倉は昭和一五年度に五回(六月二四日に森岡高農で、六月二五日に仙台高工で、一〇月二二日に名古屋高商で、一月二六日に鹿児島高商と鹿児島高農で)、昭和一六年度に一回(一月一日に高千穂高商で)、昭和一七年度に三回(七月一七日に中央大学で、九月二日に上田蚕専で、一八年二月三日に拓殖大学で)、昭和一八年度に二回(一〇月一日に高松高商で、一〇月一二日に新居浜高工で)担当している。

大倉が担当した日本文化講義のうち現時点で筆者が講義録の存在を確認できているのは三(二)で紹介した昭和一三年六月二七・二八日に北海道帝大で行った講義以外では、昭和一五年五月六日の神戸高工での講義と昭和一六年五月三日の東京商船での講義の二件である。次にこれら二校における大倉の日本文化講義の内容を見ていこう。

(二) 神戸高等工業学校における日本文化講義

概要

大倉が昭和一五（一九四〇）年五月六日に神戸高等工業学校（神戸大学工学部の前身）で行った日本文化講義「肇国精神ト外来文化」は同校の学生新聞である『神戸高工新聞』第一三五号にその内容が掲載された。講義の内容は概ね次のようなものであった。

大倉はまず、一億国民がごとく一致団結して精神総動員の実を挙げねばならないことを述べ、東亜新秩序建設と言っている裏で闇取引が横行し、自己の利益のみを追っている社会の風潮を嘆いた上で、国と己の二つの道を考えて迷うことから脱して、「日本臣民としての一本道にすることが現下内面の急務であり、同時に又肇国の大精神を顕揚する所以である」⁽⁴⁷⁾と説いた。

大倉は、己の利益を追求して国家に禍を及ぼすことになる原因は個人主義、功利主義、自由主義の外来思想であることを指摘し、明治以後、外来文化を本当に咀嚼したのではなく無批判に模倣したことに今日思想転換を要求されるゆえんがあるとする。その上で、今日の不平分子は肇国精神を体認することなく外来の個人主義、自由主義、功利主義の思想に捉われている人々であり、これが今日最も困っている思想問題であり、思想転換の要が叫ばれるゆえんであると論じた。

更に大倉は従来の実業界は明治以来西洋から学んだ個人主義、功利主義、自由主義の指導精神で固められてきたが、今日東亜新秩序建設という大使命遂行の国策に沿うべく報国産業へと転換を要求されており、そのためには肇国の精神に帰一しなければならぬとする。大倉によれば肇国精神の中心根本となるのは「天皇は神にまします」という一事であり、国土万民万物は挙げて「神にまします天皇」に帰一し奉るということに帰着する。天皇は天祖天照大神の

御子孫にましまし、天照大神と御一体の神として天孫降臨の砌瓊瓊杵尊に下し給へる御神勅のまにまにこの国をしらしめすのである。

そして大倉は天之御中主神、高御産巢日神、神産巢日神の「造化三神」に触れ、天照大神が天地創造の力を与えており、かつ政治経済道德の中心であったことを述べた上で、次のように西洋の思想を批判して修養を説き、講義を結んだ。

天照大神の御子孫にまします御歴代の天皇は、御一代一度の大嘗祭にて天照大神と御一体の神とおなり遊ばされ、神ながらに国をしらしめすのである。斯く、神にまします天皇の大御心を奉戴して下人民は大御業を翼賛し奉る所に万邦無比の国体はその真姿を顕現するのである。然るに個人主義、自由主義、功利主義の思想が跳梁して多くの弊を醸してゐる現状である。この原因を排除して肇国精神を顕揚するには、精神的技術的の両面、即ち幽（目に見えざる精神界）、顕（目に見える現実活動界）二つ乍らの道を修養し実行せねばならぬ。この事柄に意を致して諸君の力で明日の日本をより輝かしきものとせられん事を切望して熄まない。⁴⁸

学生の感想

大倉の講義録が収録された『神戸高工新聞』第一三五号には同校教授の瀬尾武次郎が「文化講義所感を読みて」を寄稿し、大倉が同校で行った日本文化講義に対する同校生徒の感想について講評している。日本文化講義を聴講した学生や生徒がどのような感想を抱いたかを知ることができる資料は少なく、貴重であるゆえ、瀬尾が取り上げた二件の感想（本稿では説明の便宜上、【感想A】、【感想B】と表記する）の全文を引いておく。⁴⁹

【感想A】

自分は大倉氏の講演を聴くことこれで二回目である、以前に明石の公会堂で氏の話を傾聴したことがある。氏は教育事業に又産業に関係しをられるので卓越せる社会認識と肇国精神、所謂日本精神を持つて居られる、そしてあの流暢な比喻を混へた弁説、人を惹きつけるあの立派な人格、自分は大倉氏に絶大の敬意を払ふ。

現代日本人の多くが日本精神を良く知りながら此の精神に反するやうな行動をなす、これは実に過ぎた個人主義思想に影響されたものである、日本人は滅私奉公、尽忠報国でなければならぬ知つて居ても行はないのは肇国精神が徹底しないからである思想は昨今悪化の一路をたどつてゐる、我等は産業報国の精神でもつて確固たる信念で他を指導して国家に御奉公致さねばならぬ

【感想B】

肇国精神と外来文化と言つた様な演題は近来よく耳にする所であつて其の述べんとせらるゝことは結局同じ様な到達点に達するやうである、大倉氏の講演も亦大体に斯様なものと思はれた、唯氏の豊富なる識見は我等に極めて平易に面白く説明を与へられた「肇国精神と外来文化」——斯様な講演は到達点が同じ様なものであつても何度聴いてもそれで終りと言ふ様なものではない。我等は何度も繰返して聴き、肇国の大精神に則り、日本人としての教養を高めたい

いずれの感想も大倉の講義をよく理解し、比較的好意的に受け止めているものであるが、瀬尾は【感想A】については感激的、【感想B】については老成的と評している。瀬尾によれば講演時間が三時間であつたことについて学生の方では「ゆっくり聴けた」と「長過ぎる」との相反する意見があつたようであり、大倉が相当実例を挙げ具体的に述べたことについても「抽象的でなくよく分かつた」、「氏の講演は抽象的で良く分からなかつた」と対照的な意見が

出たとのことである。この他、「時間が足りなかつたので止むを得ぬけれども結論が聴き度かつた」と書いた学生が相当あったとも瀬尾は触れている。

神戸高工における大倉の日本文化講義については生徒から不満も出たようであるが、好意的に受け止める生徒も一定数存在し、その意味では思想善導という日本文化講義の趣旨に適う結果になったものと考えられる。

(三) 東京高等商船学校における日本文化講義概要

大倉が昭和一六（一九四一）年五月三日に東京高等商船学校（東京海洋大学の前身）で行った日本文化講義は『海洋』第四九九号に掲載された。「日本精神の具体性」という演題で行われた大倉の講義は概ね次のような内容であった。

眼に見える世界と眼に見えざる世界があるということから大倉は話を始める。大倉が重視するのは眼に見えない幽の世界すなわち精神訓練の世界である。大倉は西洋における神の考え方や中国における天の考え方を述べた後、日本については古事記を引き天之御中主神、高御産巢日神、神産巢日神の造化三神を取り上げ、「天御中主神が中心でムスビの神の働きによつて生々発展して此の宇宙が出来て行き、国土、万物、臣民総てが生まれて行く、宇宙創造の神様天御中主神を中心として高皇産靈神、神皇産靈神の御力に依つて万物が出来て来たのであります」と説く。

大倉は日本本来の精神が支那の学問が入って来た時に薄らいだことを菅家遺識や和魂漢才に触れながら言及し、また今日に至って日本の肇国の精神や国体の本義に則するということが強調され方向を転換しなければならなくなった理由として文明開化に伴う西洋の模倣追隨の歴史を挙げ、これについて批判的に説明していく。その上で「日本精神の

具體的の中心、根本たるものは現御神であらせられる 天皇の信奉であります。神にまします 天皇として仰ぎ奉ることの出来る様な精神を造るといふ事であります⁵¹」と述べ、日本の国体の中心、根本は現御神天皇に始まり天皇に帰一することや、帝国憲法も皇祖祖宗から御一系の天皇の実行遊ばすその思し召しを成文にしたものであることなどを説いた。

更に大倉は日本の政治、経済、教育などの眼に見える方の世界（顕）がうまくいかないのは幽の世界すなわち精神訓練の世界が忘れられていたからだと言及し、天皇に対し奉って臣民としての全部を捧げていくという皇国の道に則った国民の錬成や、日本臣民として天皇の思し召しに叶うように職域奉公することを唱えた。大倉は言う。

日本の精神といふものが、只精神が精神として内にあるんでなく此の精神を日常の生活を通して活かして来る為には国民行事や、修業、錬成、生活、斯ういふものが表となり裏となつて行かなければならぬのであります。只口で言つてるだけでは臣道実践も標語の空廻りになる。⁵²

大倉によればいわゆる大政を翼賛するというところまで頭を練るのが行であり、従来の学問は行というものを欠いていた。「日本の国体が判らうといふことは、躰、行、生活、仕事といふものを通して、自分の躬を以て体認することとでなければならぬ⁵³」ことを指摘した上で、大倉は仕事そのものを精神的なものに結び付けていくことによって初めてその仕事が生きてくる、それが最も具体的な人間錬成の道であると述べ、講義を締めくくった。

なお、『海洋』第四九七号の「越中島たより」では「大倉学長の獅子吼」との見出しの下、大倉が東京商船で行った日本文化講義について「言々句々肺肝よりほとばしり、形式界（顕）に於ける日本精神を批判し、幽界に於ける精神力の涵養を力説せられた。幽界に於ける精神力の涵養は一の誠より出づ。誠の行より出づ。誠の行は国体の本義を身を以て体得するに出づと説く。生徒に与へたる感銘深し⁵⁴」と伝えている。

小冊子『日本精神の具体性』

東京商船での日本文化講義から約一年後に同校での日本文化講義の演題と同じ書名を持つ『日本精神の具体性』(新国民文化叢書、昭和一七年六月)という小冊子が刊行された。これは産業界、教育界、行政関係等各方面の指導階級を対象とする新国民文化講習会における大倉の講演速記を大倉が訂正加筆して上梓したものである。「はしがき」には「文部省内 財団法人勤労者教育中央会」の名前で「大東亜建設の実質的な力としての新国民文化の創造が時代の急務たる秋に当り、この世界的使命を達成すべき皇民を錬成するの大任を担へる各方面の指導者のために本叢書を刊行する」と書かれている⁽³⁵⁾。

この小冊子の中で大倉は日本精神の骨髓は神皇信奉であると説き、明治・大正の教育を西洋の模倣の教育だと批判した。その上で、今日の新体制は天皇の思し召しに適うように臣民としての職域奉公をすることになったと唱え、「訓練や国民的な躰が出来て、それが土台になつて、始めて日本精神の具体性が国民活動の中に顕現されるものと信じて居ります⁽³⁶⁾」と結んでいる。大倉は東京商船での日本文化講義を下敷きに一般国民を挙げて全部襖褌して行的訓練を自ら体験する必要があることを各界の指導階級に訴えたのであった。

五 大倉にとっての日本文化講義

ここまで昭和一三(一九三八)年六月の北海道帝大、昭和一五年五月の神戸高工、昭和一六年五月の東京商船の三校における講義を中心に大倉が担当した日本文化講義の内容を見てきた。昭和一三年から一七年までに大倉は一三校で一五回にわたり日本文化講義を担当することを通じて、文部省直轄諸学校の学生・生徒を対象とする思想善導講義

に関与し、文部当局の教学刷新事業に協力することとなった。以下では日本文化講義を担当したことが大倉にとってどのような意義を持ったかについて考察する。

(一) 日本文化講義の趣旨貫徹による教学刷新の実践

文部省直轄諸学校で昭和一一(一九三六)～一六年度に実施された日本文化講義のうち、演題に「日本文化」もしくは「日本精神」が入っている講義は開始直後の昭和一一年度では全体の二四・九%、翌一二年度は一四・二%であった。しかし、教学局が昭和一四年二月一八日付けの通牒で「明年度ハ時局ニ関スル諸問題特ニ時局ノ進展ト我が国ノ使命及日本文化ノ創造發展等ニ関シ指針ヲ与フベキ講義ヲ加ヘラレ以テ現下ノ時局ニ於テ本講義ノ機能ヲ最モ有効ニ發揮セシメラルヤウ御配慮相成度候」と各校に通達し、更に昭和一六年三月四日付けの通牒で「尚本年度ハ時局並ニ皇国ノ使命ニ鑑ミ一層国体觀念ノ徹底ヲ期スルト共ニ新体制ノ諸問題・国土計画・人口問題・食糧問題・大陸政策・太平洋問題等ニ関スル講義ヲモ加ヘ以テ十分成果ヲ挙グルヤウ特ニ御配慮相煩度候」と時局に関する諸問題を取り扱うよう各校に要請したことを反映し、時局や大東亜関係など実的な主題を取り扱う講義が全体的に増えていくこととなり、「日本文化」もしくは「日本精神」が演題に入った日本文化講義は昭和一五年度は五・七%、一六年度は六・一%と全体の一割を大きく切るところまで構成比を低下させることとなった。

これに対し大倉が担当した一五件の日本文化講義については演題が確認できる一四件のうち一二件が「日本文化」もしくは「日本精神」という言葉を演題に含んでいた。残りの二件も「皇国ノ基本ト外来文化」、「肇国精神ト外来文化」という演題であることから見て、大倉が担当した日本文化講義のすべてが実質的には「日本文化」、「日本精神」を主題とする内容であったと考えられる。一貫して日本文化や日本精神を主題として講じた点で大倉は「日本精神の

発揚に資する」、「日本独自の文化・学問に対する理解・体認を得させる」という日本文化講義のそもその趣旨を貫徹したと言うことができる。

それは大倉にとって日本文化講義が単なる文部当局による教学刷新事業への協力にとどまらず、自ら教学刷新を實踐する機会という意義を有していたからだと考えられる。北海道帝大、神戸高工、東京商船での日本文化講義は時間の経過による時局の変化もあり、それぞれに講義の力点は異なっていた。北海道帝大での講義に比べ神戸高工での講義は「一億国民が悉く団結して精神騒動員の実を挙げねばならぬ」といったより実際的な話が多くなっており、また、東京商船での講義では国民錬成の実践に重点が置かれていた。

他方で北海道帝大、神戸高工、東京商船の三校での日本文化講義には内容上の共通点も多く見られた。天之御中主神、高御産巢日神、神産巢日神の造化三神に触れ、日本文化あるいは日本精神の中心（真髓）を神皇信奉（天皇の信奉）だとしている点、歴代天皇が天照大神の子孫であることを強調し、天照大神と一体の神であることについての言及、天皇の臣民としての日本人の自覚の必要性を強調する点はいずれも三校での日本文化講義に共通するところである。

また、外来文化を咀嚼することなく無批判に模倣したことや、外来の個人主義、自由主義、功利主義の思想を鵜呑みにすることへの批判、美濃部達吉の天皇機関説に対する批判、明治天皇が東京帝大への行幸時に自然科学方面の進歩に対し東洋の道徳や日本の古典が講じられていないことを懸念した話などは三校おける日本文化講義に共通するものであった。

つまり大倉は日本文化、日本精神に関する持論を日本文化講義の中で展開することにより自ら教学刷新を実践しようとしたに過ぎず、そこには文部当局の教学刷新事業に動員されているというような受動的な姿勢や意に反しながら

時局に迎合した講義を行うというような消極的な姿勢は微塵も認められない。

むしろ文部当局の教学刷新事業の一つである日本文化講義の講師を引き受け、帝国大学や官立大学、高等学校、実業専門学校で学生・生徒に直接、日本文化や日本精神について教育を行うことを通じ神皇信奉の信念や臣民道の実践を説くことは、大倉研の設立趣意で謳った「宗教的信念に基づく人生観の確立」、「健全なる国家観の確立」を若い学生・生徒に対して図らんとすることであり、大倉にとっては本望であったと考えられる。

実際に大倉は、各講義の最後で、「日本文化の真髄を世界的に発揚するよう考えよ」（北海道帝大での第一講）、「天皇の御民である日本人だという大自覚の上に立つには修養修業による体験の深化をまたねばならぬ」（同第二講）、「日本精神体認への道を歩み出せ」（同第三講）、「肇国精神を顕揚するには幽、顕二つながらの道を修養し実行せよ」（神戸高工での講義）、「仕事そのものを精神的なものに結び付けることにより国民錬成を实践せよ」（東京商船での講義）といった主旨で訴えており、日本文化講義を通じて自らの教育信念の実現を図ろうとした。

大倉が日本文化講義にどの程度まで重要な意義を見出していたかについては現時点で大倉自身の発言等を確認できていないため不明である。ただ、昭和八年発行の『私の使命事業』（皇紀二五九三年度版）で大倉は「感想発行以来、諸方面より、私の講演を依頼して参りますので、事情の許す限り之に応じて居ります。之は私の平素の思想を直接に開陳し、宗教的信念を自覚せしめ、正しい国家観を鼓吹し得る最良の機会でありまして、感想の発行と相俟ち、私の心身を磨して居るものであります」と語っていることを踏まえると日本文化講義にも相応の意義を見出していたと思われる。

なお、大倉への献呈として刊行された『大倉邦彦先生献呈論文集国史論纂』（昭和一七年）では「大倉邦彦先生講演記録」について「一 放送」、「二 日本文化講義其他特別講義」、「三 産報精神特別講義」、「四 官庁関係講演」、

「五 教育関係講演」、「六 実業関係講演」、「七 其他」に分けて記述し、「日本文化講義」と「産報精神特別講義」を独立した項目として扱った上で、講義題目の記載までではないものの昭和一六年度までに大倉が行った日本文化講義の学校・実施日を記録している。教学刷新の実践という意義をある程度踏まえてのことかとも推測される。

先に三（三）で見た通り、北海道帝大での日本文化講義の「講義ノート」は雑誌『躬行』における論考や『放送処世信念』（昭和一二年）などこれまでに大倉が随所で著述、講述してきた日本精神や日本文化に関する持論を入念に準備し講義材料として構成したものであり、それはまた後に上梓する『勤勞教育の理論と方法』（昭和一三年）や『日本産業道』（昭和一四年）の形成にも関係するものであった。また、東京商船の講義もその内容から考えて小冊子『日本精神の具体性』（昭和一七年）の形成につながったものと見られる。大倉にとって日本文化講義の担当は自らの思想を深化させる機会にもなったと思われる。

このように日本文化講義という思想善導の場で学生・生徒に講義することは大倉にとって教学刷新の実践、自らの教育信念の実現、己の思想の深化をもたらし機会という意義があった。

（二）文部当局からの認定

大倉にとって日本文化講義の担当を重ねていくことは大倉精神文化研究所の所長や東洋大学の学長という肩書きだけでは得られぬ「教学刷新を实践する教育者」、「日本精神論者」としての認定を文部当局から得られることにもなると考えられる。

既に三（二）で述べた通り、文部省思想局が日本文化講義の講師選定に資するよう昭和一一（一九三六）年夏に文部省直轄諸学校に送付した講師一覧「日本文化講義講師表」に掲載されている講師一三六名に大倉の名前は入ってい

なかった。文部省思想局は昭和一〇年一月に思想調査資料特輯として『日本精神論の調査』というマル秘の冊子を出した。これは「日本精神の至醇なる發揚に資せんがために、主として昭和の初より今日に至るまでの間に現れた日本精神論の内容を調査することを目的としたもの」⁽⁹⁾であり、前篇では日本精神論の三類型すなわち革新的日本精神論、理論的日本精神論、実践的日本精神論のそれぞれが主な提唱者の名前やその論とともに紹介され、後篇では五四名の諸家の日本精神論の要約紹介がなされている。この冊子には寛克彦、山本信哉、唐子木員信、河野省三、紀平正美、吉田熊次などの名前は見られるが、大倉の名前は出ていない。

つまり大倉は大正一四（一九二五）年から毎年『感想』を発行し、昭和七年には大倉研を創設して教学刷新を自ら実践し始め、昭和九年より雑誌『躬行』を発行して自己の所信を毎月発表してはいたが、昭和一〇年時点では大倉の日本精神論は文部当局による調査対象となるほどの注目は受けておらず、「日本文化講義講師表」に名前が掲載されることにならなかったと見られる。

しかし、大倉の『放送処世信念』は教学局が昭和一三年三月に発行した『思想指導に関する良書選奨』の選には漏れたものの社団法人日本図書館協会編『良書百選』第七輯（昭和一三年三月）には選ばれ、昭和一四年以降、大倉の著書は次の通り、文部当局の統制を受けていた大日本青年団等の推薦図書や文部当局の推薦・選奨図書に選定された。

大日本青年団総務部企画課編『推薦図書目録』第二〇輯（昭和一四年八月）に『勤勞教育の理論と方法』

大日本青年団本部編『推薦図書目録』第二二輯（昭和一五年四月）に『日本産業道』

大日本青年団本部編『推薦図書目録』第二三輯（昭和一五年二月）に『随想 飛び石』

鹿児島県女子師範学校研究部編『国民学校参考書目解題』第一輯（昭和一六年一月）に『勤勞教育の理論と方法』

教学局『文部省推薦並教学局選奨図書思想関係発禁図書一覧』（昭和一七年二月）に『勤勞教育の理論と方法』もちろん、日本文化講義の担当がこれらの推薦図書の選定にどの程度寄与したかは不明である。しかし、文部当局が主導する思想善導の講義を担当しているという事実が全く影響していないとも考え難い。

大倉は教学局指導部指導課が作成した「日本文化講義諸講習会講師一覧（事務参考用）」（表紙に「昭和十七年五月二十七日」と記載）に掲載された。この講師一覧は三八〇名の講師を「一、哲学関係」、「二、歴史関係」、「三、文学芸術関係」、「四、法政関係」、「五、経済関係」、「六、自然科学」、「七、時局関係」、「八、其の他」の八分野に分類し、更に狭義の専門分野（例えば哲学関係なら哲学、倫理学、社会学、心理学、教育学、宗教学など）に分けて掲載している。大倉は「八、其の他」に分類され、狭義の専門分野は未記載であり、官職としては東洋大学長と記載されていた。

「八、其の他」に分類されているのは大倉を含め九名であったが、他の八名は出光万兵衛（海軍中将）、大蔵公望（貴族院議員）、小畑源之助（日本ペイント社長）、清水莊平（北辰電機製作所長）、下村宏（貴族院議員）、滝正雄（前企画院総裁）、鶴見祐輔（衆議院議員）、八角三郎（衆議院議員）であり、軍人、実業家、政治家であった。大倉の実業家、教育者あるいは思想家としての多面的活動を踏まえ、「哲学関係」（哲学、教育学、宗教学）ではなく、敢えて「其の他」に分類された可能性が高い。

「日本文化講義講師表」に比べ掲載されている講師の数が多くなったはいえ、各校が日本文化講義の講師選定に当たり参考資料として用いる「日本文化講義諸講習会講師一覧（事務参考用）」に大倉の名前が加わったのは昭和一六年度までに日本文化講義の講師を一四回務めたという実績あったことであるのは間違いないだろう。これにより大倉は日本文化講義の講師としていわば文部当局のお墨付きを得る形になった。

おわりに

本稿ではまず教学刷新の実践という視点から大倉邦彦に焦点を当て、大倉精神文化研究所を通じた教学刷新に対する大倉の取り組みを概観し、その先取性について触れた。文部省、教学局、国民精神文化研究所が教学刷新事業の公的推進機関であるとすれば大倉が所長を務めた大倉研は教学刷新事業の私的推進機関であり、大倉はいわば在野の教学刷新実践者であった。

また、戦時期の教学刷新事業の一つである「日本文化講義」のうち大倉が担当した講義を取り上げ、大倉がどのような内容の講義を行い、どのような準備を行ったのかについて考察した。日本文化、日本精神に関する持論を日本文化講義の中で展開することは自ら教学刷新を実践することに他ならず、大倉研の設立趣意で謳った理念を思想善導の講義の場で実現していくこともあった。

本稿には幾つかの課題が残る。まず、終戦直前までの大倉研の事業について本稿では単なる概観にとどめざるを得なかった。しかし、本誌第五〇輯の「特集にあたって」に書かれている「大倉邦彦は学術研究の対象たり得る人物であり」という言葉に擬して言えば「大倉精神文化研究所は学術研究の対象たり得る機関」である。大倉研の理念、人的構成、推進事業について精査し、教学刷新を実践する民の研究機関の実態をより明らかにする必要がある。

このことも関係するが、大倉研と精研の比較考察も一段と詳細に行う必要がある。教学刷新を推進する官の研究所たる「国民精神文化研究所」（昭和七年八月設立）と民の研究所たる「大倉精神文化研究所」（昭和七年四月設立）がほぼ同時期に創設されたのは偶然という言葉だけでは片づけられず、教学刷新は決して文部当局が一方的に上から展開したものでないことを示唆している。教育史の研究においても官の動きだけでなく当時の民の動きに

ついても十分な考察が必要であり、官と民の「精神文化研究所」について、それぞれの理念や実施事業のみならず人的関係にも目を配りながら詳しく分析していくことが待たれる。

『躬行』の「大倉山だより」や大倉精神文化研究所沿革史資料の『日誌』などの記述を見る限り、大倉研は精研関係者からしばしば参観を受けている。⁽⁶²⁾昭和一一年度以降の『事業報告』の「本所見学者」の項目に記載されている毎年度の精研関係者の見学者数を足すと、昭和一一年度三〇名、昭和一二年度一〇七名、昭和一三年度六四名、昭和一四年度三六名、昭和一五年度三〇名、昭和一六年度四〇名、昭和一七年度一〇名、昭和一八年度五名であり、見学者は八年間で三〇〇名を超える数にのぼっている。精研と大倉研は相互に他方をどのように認識していたか、両者の間ではどのような交流があったのかなど、様々な観点からの分析が求められよう。

日本文化講義については大倉が昭和一二年七月から六年間にわたり学長を務めた東洋大学においてどのように展開されたかを知るために文部当局との往復文書や教務日誌などの学内資料を利用した調査が不可欠である。これについては東洋大学における学内資料の整備が進展することを待ちたい。⁽⁶³⁾

また、大倉の日本文化講義の特徴を浮き彫りにすべく、河野省三、紀平正美、吉田熊次といった他の日本精神論者が行った日本文化講義と比較考察する必要もあろう。

(附記) 本研究はJSPS科研費「JP26380262、JP18K00113」の助成を受けたものである。

注

(1)

「日本文化講義」について筆者はこれまで以下の通り、『大阪工業大学紀要』に拙稿を五度にわたり発表してきた。いずれも大阪工業大学の学術機関リポジトリでPDFファイルにて閲覧が可能である。①「戦時期の「日本文化講義」と経済学者」『大阪工業大学紀要』第五八巻第二号（人文篇、平成二六年二月）、②「講師一覧からみた戦時期の「日本文化講義」の諸相」（同第六〇巻第一号、平成二七年九月）、③「戦時期の私立大学における「日本文化講義」の展開―関西の私立大学を中心に―」（同第六一卷第一号、平成二八年九月）、④「『中外日報』紙に見る戦時期の「日本文化講義」」（同第六二巻第一号、平成二九年九月）、⑤「戦時期の私立大学に見る「日本文化講義」への対応―東京圏の私立大学を中心に―」（同第六四巻第一号、令和元年九月）。

(2)

特定の日本文化講義に焦点を当てた研究に古畑徹「七三一部隊長・石井四郎の日本文化講義―金沢大学医学部所蔵金沢医科大学資料から―」（『北陸史学』第五一号、北陸史学会、平成一四年、所収）がある。また、特定の思想家の日本文化講義に着目した研究としては中村治人「日本文化講義講師柳田国男―高等教育史における柳田学の足跡について―」（『柳田国男研究論集』第三号、柳田国男の会、平成一六年、所収）が挙げられる。ただし、中村論文は日本文化講義講師としての柳田の足跡を追ってはいくものの、史料の制約もあり柳田が行った日本文化講義の内容そのものを詳細に考察してはいない。

(3)

本稿では引用に当たり、原文における漢字の旧字体は新字体に変更して表記した。引用文中で明らかに誤字と思われる字については上部に「ママ」と付し、直後に「〔 〕」付きで正字を補した。引用文中の「〳」は改行を、「……」は中略を示す。

(4)

教学刷新の展開については主に次の文献を参照した。国立教育研究所編『日本近代教育百年史』第一巻「教育政策二」（『財教育研究振興会、昭和四九年〕、高野邦夫『天皇制国家の教育論―教学刷新評議会の研究』（あずみの書房、平成元年）、小野雅章「国体明徴運動と教育政策」（『教育学雑誌』第三三三号、日本大学教育学会、平成一一年）、久保義三『新版 昭和教育史―天皇制と教育の史的展開』（東信堂、平成一八年）、荻野富士夫『戦前文部省の治安機能』（校倉書房、平成一九年）、駒込武・川村肇・奈須恵子編著『戦時下学問の統制と動員―日本諸学振興委員会の研究』（東京大学出版会、平成二三年）。

(5) 大正一三年九月に「社会科学連合会」、大正一四年七月に「全日本学生社会科学連合会」と改称し、「学連」という略称で呼ばれた。

(6) 日本共産党への弾圧事件であったが、検挙者の約三割は学生であった。

(7) 精研については前掲注4記載の久保『新版 昭和教育史』、荻野『戦前文部省の治安機能』、駒込他『戦時下学問の統制と動員』のほか、前田一男『国民精神文化研究所の研究―戦時下教学刷新における「精研」の役割・機能について―』（『日本の教育史学―教育史学会紀要―』第二五巻、昭和五七年）が詳しく、適宜参照した。

(8) その内容は教学局編纂『教学叢書』第一輯（昭和一四年七月）に「教学刷新と教学局」という題目で収録された。

(9) 前掲注8「教学刷新と教学局」六頁。

(10) 引用は大倉精神文化研究所『沿革史稿本』（大倉精神文化研究所、平成八年）一八頁より行った。

(11) 「教学刷新評議会答申」（前掲注8『教学叢書』第一輯）一九頁。

(12) 前掲注11「教学刷新評議会答申」二四頁。

(13) 井上と今泉以外は後述する「日本文化講義講師表」（昭和一二年）や「日本文化講義諸講習会講師一覧（事務参考用）」（昭和一七年）などの日本文化講義の講師一覧に掲載されており、講師一覧に掲載されていない井上と今泉も前者は昭和一二年に上智大学で、後者は昭和一五年に関西大学で日本文化講義を担当した。

(14) 国立公文書館デジタルアーカイブで閲覧が可能である。同様に国立公文書館には「大倉精神文化研究所主催第四回日本精神講習会聴講者ニ関スル件」（昭和一二年二月四日）という行政文書も保管されており、同文書には「別紙大倉精神文化研究所長ノ申越ニ係ル第四回日本精神講習会ニ左記ノ者ヲ聴講セシムルコト可然哉」と内閣官房の二名の役人の氏名が記されている。

(15) 大倉精神文化研究所編『日本精神叢説』第一集は昭和七年一月の臨時神道講習会のうち井上、河野、黒板、植木、宮地、田中、今泉の講義録（表紙に「臨時神道講習会叢書」と記載された小冊子）を箱に収納したものであるが、各講義録の冒頭

に「刊行の辞」が掲載されており、ここでの引用はその二頁から行った。

(16) ここでは大倉精神文化研究所編輯『神典』（三省堂、四版、昭和一七年）の巻末から引用した。

(17) 「神典のこと」「躬行」第二四号、二七頁、躬行会、昭和一一年二月。

(18) 文部省『国体の本義』扉の言葉、文部省、昭和一二年三月。

(19) 辛未同志会『昭和十五年一月一日現在 辛未同志会会員名簿 並趣意書、規約』二頁、辛未同志会。

(20) 海軍有終会における昭和八年一〇月二〇日の大倉の講演「東京帝国大学の全貌」(『有終』第二〇巻第一二号、昭和八年、所収)や大倉邦彦「大学の全貌と其帰結」(『國學院雜誌』第四〇巻第六号、昭和九年、所収)は辛未同志会でのこの報告とは同じ内容である。

(21) 大倉精神文化研究所編『大倉邦彦伝』「著作・講演」三七三頁、大倉精神文化研究所、平成四年。

(22) 前掲注21『大倉邦彦伝』三七四頁。

(23) 前掲注21『大倉邦彦伝』三八八頁。

(24) 前掲注21『大倉邦彦伝』四〇六頁。

(25) 前掲注21『大倉邦彦伝』四〇七頁。

(26) 前掲注21『大倉邦彦伝』四一〇頁。

(27) 前掲注21『大倉邦彦伝』四一一頁。

(28) 大倉はこの他、『日本文化時報』第二二号に教学刷新に就ての所感を藤沢親雄(国民精神文化研究所)、村川堅固(東京帝国大学名誉教授)とともに寄せた。そこではどのように刷新すべきかという方法論について大倉は「一口に云へば最高学府の誤りを正す事によつて一般の教育はこれに風靡され、形と精神を改めるものでありますから、先づ大学内に教学刷新の意味を具体化する事が緊要であります。即ち四十二の大学をして「国体ノ精華我が国教学ノ根基ノ上ニ外来文化ノ浄化摂取ニ力メ」しむれば、以下これに準じて、容易に教学刷新の目的は達成し得られるものと信じます」(『日本文化時報』第二二号、

二頁、日本文化協會出版部、昭和十一年九月一日」と述べている。なお、大倉は『東洋大学護国会々報』第五号（昭和一七年三月一四日）所収「大東亜建設と知識人」でも教学刷新について言及している。

(29) 『躬行』第五四号、三八頁、躬行会、昭和十三年七月。

(30) 大倉と北海道帝大の関係を取って挙げるとすれば昭和三年に大倉が発行した「商売往来」（昭和三年四月二八日印刷）である。北海道大学図書館が所蔵する『商売往来』には寄贈印の押印箇所に「大倉邦彦」と書かれており、押印されている受付印の日付は一九二八年五月二〇日となっている。これを所蔵している大学図書館は国立情報学研究所のCinii（NII学術情報ナビゲータ「サイニイ」）で調べた限りでは北海道大学図書館のみである。『商売往来』は薄冊ゆえ北海道帝大以外の大学にも寄贈したものの図書として所蔵した大学は北海道帝大だけであったという可能性は残るが、大倉からすれば北海道帝大に寄贈する何らかの理由があったのかもしれない。

(31) 昭和十一年度日本文化講義が実施されるようになってから北海道帝大の学生新聞である『北海道帝国大学新聞』にはしばしばその記事が掲載されたが、大倉が担当した日本文化講義は記事として取り上げられることはなかった。

(32) 『日本文化講義』第五輯、一〇頁、北海道帝国大学生課、昭和十四年。

(33) 前掲注32『日本文化講義』第五輯、一〇頁。

(34) 前掲注11「教学刷新評議会答申」一九頁。

(35) 前掲注32『日本文化講義』第五輯、一八頁。

(36) 前掲注32『日本文化講義』第五輯、三六頁。

(37) 前掲注32『日本文化講義』第五輯、三八〜三九頁。

(38) 前掲注32『日本文化講義』第五輯、三九頁。

(39) 前掲注32『日本文化講義』第五輯、四四頁。

(40) 前掲注32『日本文化講義』第五輯、四九頁。

(41) 西岡和彦は「大倉邦彦の神道論」(『大倉山論集』第五〇輯、平成一六年)で大倉と今泉の関係や両者の神道論の比較を通して大倉の神道論を明らかにし、大倉の神道論が今泉の行学一致の神道論から影響を受けていたと論じている。

(42) 前掲注32『日本文化講義』第五輯、三七頁。

(43) 大倉の講義録である『日本文化講義』第五輯の頁数は第一講が一五・五頁、第二講が約二〇頁に對し、第三講は一二・五頁であった。

(44) 文部省直轄諸学校で実施された日本文化講義の事例については文部当局の資料より昭和一一～一六年度分は把握できる。詳しくは前掲注1で掲げた拙稿「講師」一覽からみた戦時期の「日本文化講義」の諸相」を参照せよ。大倉が担当した日本文化講義は『躬行』の「大倉山だより」でもしばしば報じられており、把握が可能である。例えば昭和一四年五月七日に京都高工で大倉が行った日本文化講義については文部当局の資料には掲載されていないが、『躬行』第七七号(昭和一五年六月)の「大倉山だより」には記述されている(三〇頁)。昭和一七年度に大倉が担当した日本文化講義についても『躬行』第一〇九号(昭和一八年二月)の「大倉山だより」に「(一月)二十二日浜松高工に日本文化講義に出張」と記されていた(一七頁)。また、『躬行』第九四号(昭和一六年一月)の「大倉山だより」には「九月十六日には文相官邸における「日本文化講義」講師の会合に出席」との記述がある(二四頁)。日本文化講義を担当する講師の会合があったことについては現時点において他の資料では確認できていないことである。

(45) 大倉研附属図書館に所蔵されている大倉邦彦の浜松高等工業学校長・木村正宛て書簡(昭和一八年一月一六日付、大倉精神文化研究所沿革史資料No38930)に「尚ほ日本文化講義の題目は左記の通りに致度御通知迄申上候」としてこの演題が記されていた。この書簡並びに三(二)で言及した北海道帝大学生課長・尾崎卓郎の書簡の存在については大倉精神文化研究所の星原大輔研究員よりご教示頂いた。

(46) 大倉精神文化研究所『事業報告(昭和一四年度)』四八頁、大倉精神文化研究所、昭和一五年(大倉精神文化研究所沿革史資料No300)。

- (47) 『神戸高工新聞』第一三五号、一面、神戸高等工業学校校友会、昭和一五年六月一〇日。
- (48) 前掲注47『神戸高工新聞』第一三五号、二面。
- (49) 前掲注47『神戸高工新聞』第一三五号、二面。
- (50) 大倉邦彦「日本精神の具体性」『海洋』第四九九号、三頁、海洋会、昭和一六年八月。
- (51) 前掲注50大倉「日本精神の具体性」七頁。
- (52) 前掲注50大倉「日本精神の具体性」一一頁。
- (53) 前掲注50大倉「日本精神の具体性」一一頁。
- (54) 「越中島たより」『海洋』第四九七号、七八頁、海洋会、昭和一六年六月。
- (55) 大倉邦彦『日本精神の具体性』はしがき一頁、目黒書店、昭和一七年。
- (56) 前掲注55大倉『日本精神の具体性』四七～四八頁。
- (57) 前掲注47『神戸高工新聞』第一三五号、一面。
- (58) 大倉邦彦『私の使命事業』（皇紀二五九三年度版）三八頁、大倉邦彦、昭和八年。
- (59) 文部省思想局『日本精神論の調査』（思想調査資料特輯）凡例、文部省思想局、昭和一〇年一一月
- (60) 文部当局が作成した日本文化講義の講師一覧の詳細については前掲注1で掲げた拙稿「講師一覧からみた戦時期の『日本文化講義』の諸相」を参照されたい。

(61) 大倉精神文化研究所「特集にあたって」『大倉山論集』第五〇輯、一頁、大倉精神文化研究所、平成一六年。

(62) 例えば『日誌 備忘録』（大倉精神文化研究所沿革史資料No.200）によれば昭和八年一〇月一八日に国民精神文化研究所研究員・宮瀬睦夫が参観、昭和九年七月二八日には国民精神文化研究所研究員五〇名が参観、昭和九年九月一九日には国民精神文化研究所所員・林均が参観、昭和一〇年六月一四日には研究員三〇余名が参観、といった記述を確認することができ、精研からは個々にあるいは団体で毎年のように参観者があったことがわかる。なお、大倉研附属図書館には国民精神文化研

究所助手・小糸夏次郎の「第三回日本精神講習会申込書」（昭和九年）が所蔵されており、大倉研の講習会への参加者の中に精研関係者がいたことも確認できる。

（63）平成三一年三月に行った当方の学内資料に関する照会に対して、東洋大学井上田了研究センターからは東洋大学百年史編纂にまとめて以降、大学史資料の整備が進んでいないという主旨の回答を得ている。